

ISSN 1347-751X

河川環境総合研究所資料

第21号

日本の河口写真集

2007年3月

財団法人 河川環境管理財団
河川環境総合研究所

発刊によせて

河川の汽水域は、陸と海の接点に位置し、比重等が異なる淡水と海水が混合し、かつ周期的に発生する潮汐と波浪などの影響を受け、常に変動する特殊な環境を有している。このため、淡水域に生息する生物や海水域に生息する生物に加え、汽水性の生物が生息・生育する多様な生態系が形成されている。反面、地形の変化等人為的なインパクトを受けると、流れや底質の動きが容易に変化することから、環境への影響を受けやすいといった変化しやすい場である。このような特性を有する河口部は、古くから漁港、港湾の整備や干拓地として開発され、高度経済成長期に入ると干拓や埋め立てが盛んに行われ、地形の改変が進んだ。河口部の地形改変の状況を記録として残すことは、汽水域環境の変遷を知る上で重要である。

そこで、全国の直轄河川を対象として、河口部の人為的インパクトを比較的受けていない時期の空中写真と人為的インパクトを受けて河口部の地形がかなり改変された近年の空中写真を収集した。河口部の空中写真を全国的範囲で収集し、地形改変の状況がわかるように整理したものは本写真集が最初であると思われる。今後、各種の人為的インパクトがさらに加えられ、河川汽水域における環境が変化した場合の情報を検討するにおいて、本写真集を活用していただければ幸いである。

なお、本写真集の作成にあたり、河口写真および汽水域の分類等の資料は「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書（平成16年5月）」（財団法人河川環境管理財団編集）作成のために収集したもの、関係事務所より新たに収集したものおよび国土地理院撮影の空中写真を複製（承認番号 平19総複、第172号）したものを使用しました。ご協力頂いた関係機関並びに関係者各位に深くお礼を申し上げます。

平成19年3月

財団法人河川環境管理財団
河川環境総合研究所
所長 山本晃一

目 次

1. 河口部の現状と課題	1
2. 全国の主要河川の河口	2
2.1 汽水域の分類	2
2.2 河口写真	6
北海道	7
東 北	23
関 東	37
北 陸	47
中 部	61
近 畿	77
中 国	89
四 国	105
九 州	115

1. 河口部の現状と課題

我が国の地形的特性から、人の利用しやすい平野部は主に沖積地からなり、氾濫による被害を受けやすく、このため洪水を安全に流下させるための河口の維持は重要であり、築堤、河道掘削・浚渫、放水路、導流堤等多くの治水事業が行われてきた。また、河口部は古くから漁港・港湾の整備や農地として開発され、高度成長期以降は干拓や埋め立てによる土地造成が行われ、建設骨材として砂利が採取されるなど、河口部の地形改変が進んだ。そして集積・高密度化した都市を守るためにさらなる河川や海岸の改修が進められてきた。

このような開発と都市化の進展により、河川や海岸の地形の直接的改変に加えて、用水量の増大による河川流量の減少や汚濁排水による負荷を受けてきた。汽水域は、これらの人為的インパクトにさらされ、環境条件は大きく変化した。

汽水域における様々な人為的インパクトは生物の生息・生育の場を消失させ、水質の汚濁がさらにそれを加速させ、汽水域の生態系は大きな痛手をこうむってきた。

近年、環境の重要性が認識されるようになり、動植物の生息・生育環境の維持、種の多様性の保全等が重要なテーマとなっている。人為的インパクトにより、これまでも水質の汚濁や海浜の縮小等、人の生活に係わる様々な問題が生じてきたが、現在は生物への配慮、そして生物の良好な生息・生育環境の維持、再生の視点からの問題が多く顕在化している。

汽水域は人にとっての生活の場、生産活動の場、水との触れ合いの場であるのみでなく、動植物にとっての貴重な生息・生育の場であることを認識し、河川環境の保全、再生に努めることが必要となっている。



写真1 河口開発の一例

2. 全国の主要河川の河口

汽水域は物理的・化学的・生物的環境が複雑に関連する場であり、場の特性は種々の要素により表現される。「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書」(平成16年5月)の中では、物理的特性をもとに汽水域の分類がなされており、本写真集においてもこれに従っている。

2.1 汽水域の分類

汽水域を規定する多様な要素の中から、潮位変動、波浪及び河床材料の代表粒径毎に、日本の汽水域を次のように大まかにタイプ分けし、表 2-1 にタイプ分けした河川のグループ、図 2-1 にタイプ分けした河川の位置図、図 2-2 に潮位差と代表粒径による河川の散布図を示す。

① 日本海に流入する河川

日本海に面した河川で、潮位差 0.6 m 以下とすると小さいグループであり、泥・砂河川と砂利河川がほぼ同数である。流域面積をみると、砂利河川は 211 ~ 1,190km²、泥・砂利河川は 270 ~ 14,330km² となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

<緑色で示したグループ：泥・砂 23 河川、砂利 10 河川の計 33 河川>

② 瀬戸内海の東部に流入する河川

瀬戸内海に流入する河川で、潮位差 0.6 ~ 2 m 程度のグループであり、泥・砂河川と、砂利河川が 2 河川ずつとなっている。

<青色で示したグループ：泥・砂 2 河川、砂利 2 河川の計 4 河川>

③ 太平洋、オホーツク海に流入する河川

太平洋、オホーツク海に面した河川で、潮位差 0.6 ~ 2 m のグループであり、泥・砂河川と砂利河川がほぼ同数である。流域面積をみると、砂利河川は 508 ~ 3,990km²、泥・砂河川は 464 ~ 16,840km² となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

<空色で示したグループ：泥・砂 16 河川、砂利 15 河川の計 31 河川>

④ 東京湾、伊勢湾、瀬戸内海に流入する河川

東京湾、伊勢湾、瀬戸内海に流入する河川で、潮位差 2 ~ 4 m のグループである。球磨川も含まれている。このグループはさらに河床材料によって泥・砂河川と砂利河川に分けられる。流域面積をみると、砂利河川は 140 ~ 1,465km²、泥・砂利河川は 235 ~ 8,917km² となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

<橙色で示したグループ：泥・砂 18 河川、砂利 7 河川の計 25 河川>

⑤ 主に九州沿岸に流入する河川

九州沿岸の河川で、有明海と瀬戸内海に流入する河川を除く外海に面した河川であり、潮位差2～4 m程度である。これらのほか、このグループには、天竜川、菊川も含まれる。

<黄色で示したグループ：泥・砂6河川、砂利2河川の計8河川>

⑥ 有明海に流入する河川

有明海に流入する河川で、潮位差4 mより大のグループで泥・砂河川である。

<桃色で示したグループ：8河川>

【タイプ分類に用いた指標】

<潮位変動の大きさ>

河口近傍潮位観測所における直近1ヶ年の朔望平均満潮位と朔望平均干潮位との差を用いた。

<波浪の大きさ>

河口の位置により内湾型と外海型の別を判断した結果を用いた。内湾型は、東京湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海等の内海に流入する河川で、河口砂州が形成されにくい。一方、外海型は外海に面し、波浪により河口砂州が形成されやすい。

<河床材料>

河床材料から砂・泥河川と砂利河川の別を判断した結果を用いた。

低水路における概ね1 km 毎の粒度試験結果から、 D_{60} （60%粒径）を求め、河口近傍の値を見て5mmを超える箇所が2ヶ所以上ある場合、あるいは5mmを超える箇所は1ヶ所であるが、他の地点も同等の値を示す場合に砂利河川とし、砂利河川以外を砂・泥河川とした。

（「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書 平成16年5月」より）

表 2-1 タイプ分けした河川のグループ

潮位差	内湾型		外海型	
	泥・砂利河川	砂利河川	泥・砂利河川	砂利河川
4 m超	本明川 六角川 嘉瀬川 白川 矢部川 菊池川 緑川 筑後川			
2m~4m	鶴見川 鈴鹿川 小瀬川 佐波川 雲出川 大分川 豊川 芦田川 庄内川 多摩川	太田川 旭川 矢作川 球磨川 吉井川 高梁川 荒川(関東) 木曾川	土器川 重信川 榑田川 山国川 宮川 肱川 大野川	菊川 松浦川(1.964) 肝属川 遠賀川 川内川 大淀川
0.6m~2m	大和川 淀川	播保川 加古川	番匠川 高瀬川 名取川 鳴瀬川 綱走川 久慈川 五ヶ瀬川 常呂川 馬淵川 釧路川 那珂川 吉野川 阿武隈川(2.11) 十勝川 北上川 利根川	物部川 安倍川 狩野川 那賀川 渚滑川 鶴川 大井川 沙流川 湧別川 仁淀川 紀の川 相模川 四万十川 熊野川 富士川
0.6m以下			留萌川 梯川 常願寺川 小矢部川 赤川 関川 庄川 千代川 円山川 尻別川 由良川 斐伊川	岩木川 神通川 九頭竜川 江の川 米代川 雄物川 天塩川 最上川 阿賀野川 信濃川 石狩川

注) 平成 14、15 年度のアンケート調査及び潮位より作成したものである。() 書き数字は、潮位差のタイプ分けの基準値からはずれている場合に特記したものである。各欄の河川は流域面積の小さい順に並べてある。

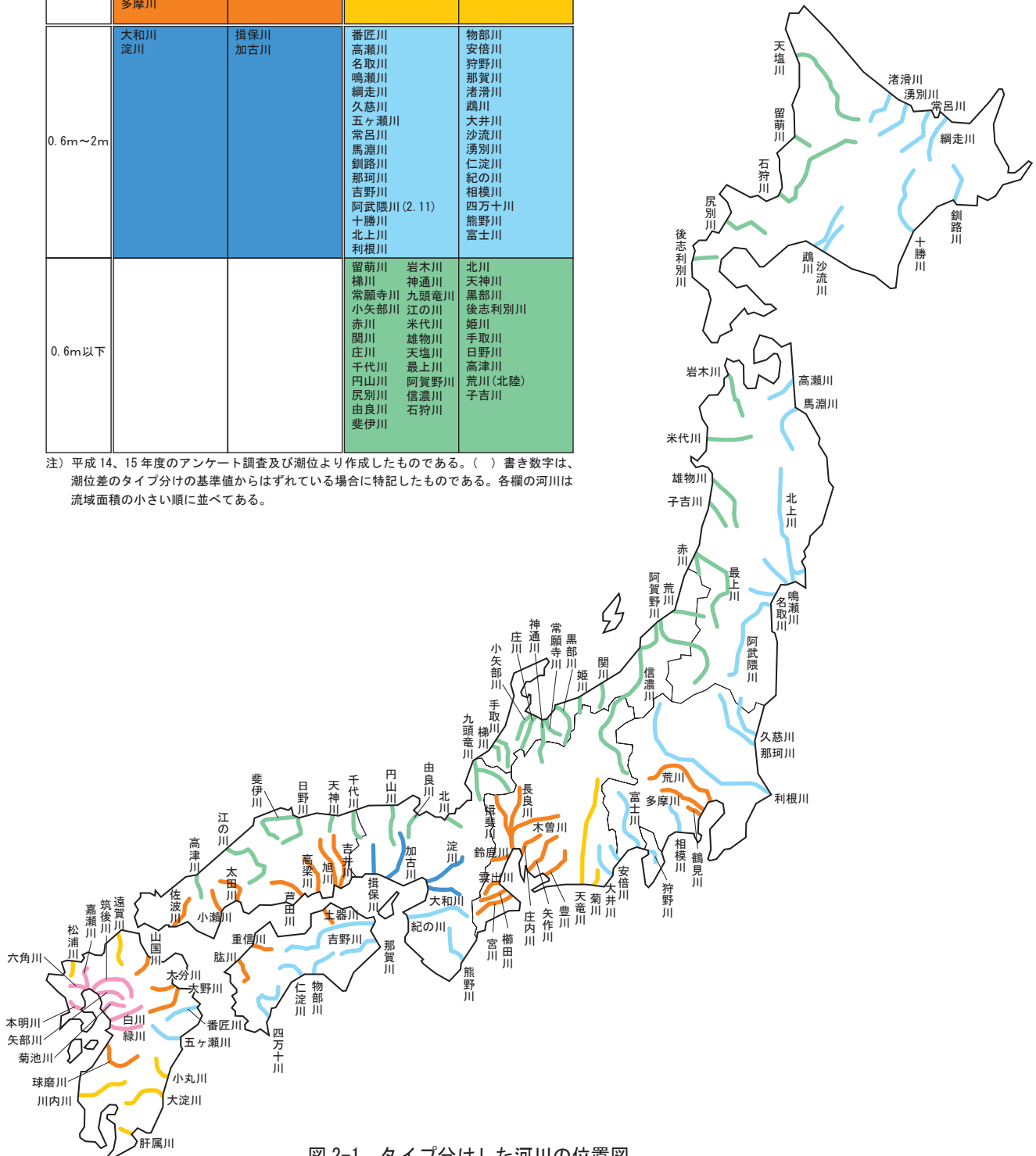


図 2-1 タイプ分けした河川の位置図

(「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書 平成 16 年 5 月」より)

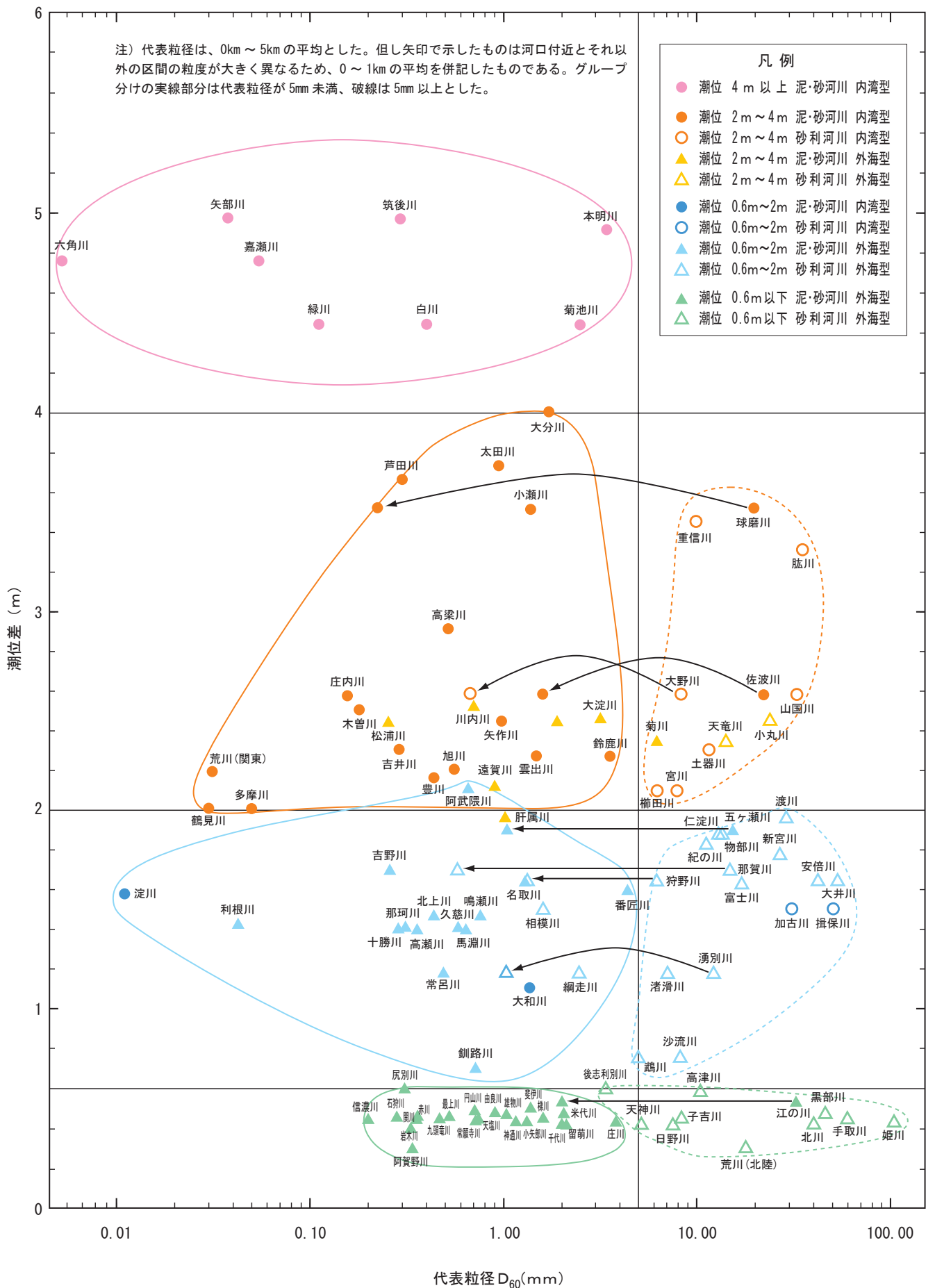


図 2-2 潮位差と代表粒径による河川の散布図
 (「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書 平成 16 年 5 月」より)

2. 2 河口写真

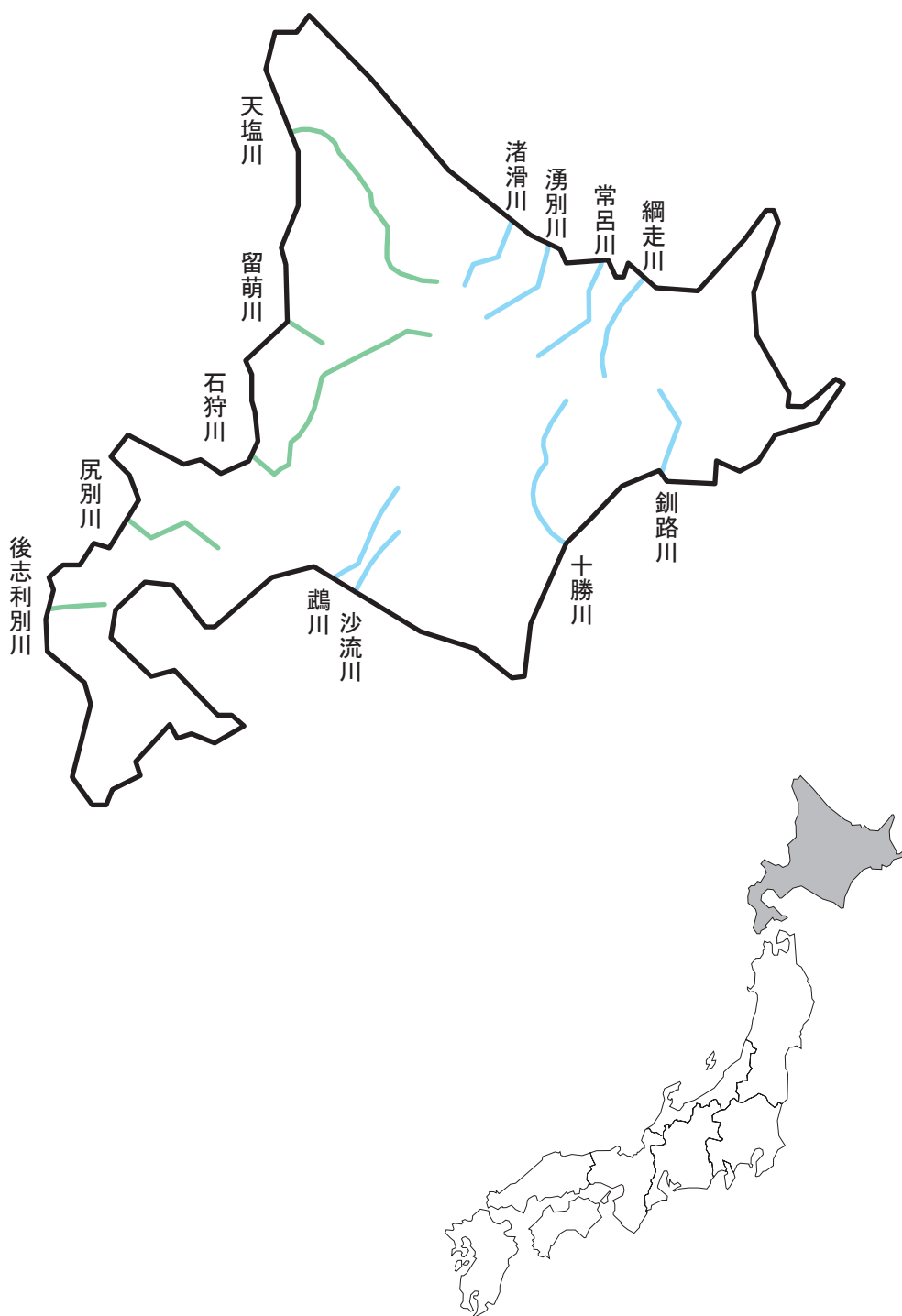
全国の一級水系の主要河川の河口部について、現在および過去（1961年～1978年）の空中写真を紹介する。なお最新の空中写真は、「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書」（平成16年5月、河川環境管理財団編集）より引用したもの、事務所で撮影した最新のものおよび国土地理院撮影の最新の空中写真を使用した。過去の空中写真は国土地理院撮影の空中写真を使用した。なお、これらの空中写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号 平19総複、第172号）

表 2-2 全国の主要河川一覧

管轄地方整備局	水系番号	河川名	流域面積 (km ²)	幹線流路延長 (km)	平均流量 (m ³ /s)	管轄地方整備局	水系番号	河川名	流域面積 (km ²)	幹線流路延長 (km)	平均流量 (m ³ /s)
北海道	1	天塩川	5,590	256	109.99	中部	56	雲出川	550	55	8.77
	2	渚滑川	1,240	84	26.83		57	櫛田川	436	87	13.35
	3	湧別川	1,480	87	27.25		58	宮川	920	91	38.43
	4	常呂川	1,930	120	21.55	近畿	59	由良川	1,880	146	39.47
	5	網走川	1,380	115	14.33		60	淀川	8,240	75	163.46
	6	留萌川	270	44	10.13		61	大和川	1,070	68	15.00
	7	石狩川	14,330	268	112.79		62	円山川	1,305	68	* 37.40
	8	尻別川	1,640	126	58.79		63	加古川	1,730	96	27.89
	9	後志利別川	720	80	21.86		64	揖保川	810	70	* 29.04
	10	鷲川	1,270	135	31.18		65	紀の川	1,750	136	31.68
	11	沙流川	1,350	104	38.45		66	熊野川	2,360	183	123.44
	12	釧路川	2,510	154	25.70		67	九頭竜川	2,930	116	105.07
	13	十勝川	9,010	156	71.16		68	北川	211	30	9.76
東北	14	岩木川	2,540	102	90.25	中国	69	千代川	1,190	52	38.98
	15	高瀬川	867	64	18.31		70	天神川	490	32	13.28
	16	馬淵川	2,050	142	65.31		71	日野川	870	77	22.46
	17	北上川	10,150	249	380.92		72	斐伊川	2,070	153	39.27
	18	鳴瀬川	1,130	89	26.56		73	江の川	3,900	194	51.49
	19	名取川	939	55	16.85		74	高津川	1,090	81	* 51.88
	20	阿武隈川	5,400	239	59.72		75	吉井川	2,110	133	41.44
	21	米代川	4,100	136	110.36		76	旭川	1,810	142	38.99
	22	雄物川	4,710	133	314.90		77	高梁川	2,670	111	44.20
	23	子吉川	1,190	61	81.27		78	芦田川	860	86	5.90
	24	最上川	7,040	229	436.66		79	太田川	1,710	103	56.40
	25	赤川	857	70	75.73		80	小瀬川	340	59	9.53
	関東	26	久慈川	1,490	124		24.06	四国	81	佐波川	460
27		那珂川	3,270	150	90.71	82	吉野川		3,750	194	75.57
28		利根川	16,840	322	256.21	83	那賀川		874	125	47.44
29		荒川	2,940	173	30.48	84	土器川		140	33	0.74
30		多摩川	1,240	138	41.05	85	重信川		445	36	1.01
31		鶴見川	235	43	10.83	86	肱川		1,210	103	18.97
32		相模川	1,680	109	-	87	物部川		508	71	26.73
33		富士川	3,990	128	58.94	88	仁淀川		1,560	124	80.88
北陸	34	荒川	1,150	73	144.84	九州	89	四万十川	2,270	196	88.56
	35	阿賀野川	13,761	210	451.22		90	遠賀川	1,026	61	16.99
	36	信濃川	12,597	367	518.39		91	山国川	540	56	14.59
	37	関川	1,149	64	50.48		92	筑後川	2,863	143	78.38
	38	姫川	722	60	60.53		93	矢部川	647	61	13.00
	39	黒部川	682	85	17.20		94	松浦川	446	47	9.68
	40	常願寺川	368	56	16.85		95	六角川	341	47	3.44
	41	神通川	2,720	120	151.26		96	嘉瀬川	368	57	10.99
	42	庄川	1,180	115	34.24		97	本明川	87	21	45.13
	43	小矢部川	667	68	32.94		98	菊池川	996	71	21.12
	44	手取川	809	72	83.22		99	白川	480	74	19.22
	45	梯川	271	42	18.56		100	緑川	1,100	76	23.91
中部	46	狩野川	852	46	22.44	101	球磨川	1,880	115	89.76	
	47	安倍川	567	51	* 41.44	102	大分川	650	55	17.32	
	48	大井川	1,280	168	36.13	103	大野川	1,465	107	54.95	
	49	菊川	158	28	1.54	104	番匠川	464	38	9.97	
	50	天竜川	5,090	213	135.11	105	五ヶ瀬川	1,820	106	58.61	
	51	豊川	724	77	14.55	106	小丸川	474	75	32.83	
	52	矢作川	1,830	118	18.09	107	大淀川	2,230	107	* 107.61	
	53	庄内川	1,010	96	* 26.21	108	川内川	1,600	137	70.94	
	54	木曾川	9,100	229	168.78	109	肝属川	485	34	26.38	
	55	鈴鹿川	323	38	5.12						

出典：河川名は、2007年3月現在の国土交通省河川局情報ホームページ「日本の川」参照。流域面積、幹線流路延長は「河川ハンドブック」（2006年版）。平均流量は「河川便覧」（平成18年度版、*平成16年度版）。

北海道



天塩川 1



留萌開発建設部 撮影



1964年9月撮影

天塩川（てしおがわ）は、流域面積 5,590km²、幹線流路延長 256km を有する。北見山地の天塩岳付近に源を發し、名寄盆地を北上し、天塩平野に出て幌延町と天塩町の境を西へ流れるが、海岸目前で浜堤に行く手を阻まれ、海岸線沿いを 10km ほど南流したのち日本海に注いでいる。現在の河口部は導流堤が延長され、左岸側には、天塩港が建設されている。

渚滑川 2

北海道



網走開発建設部 撮影 (2002年)

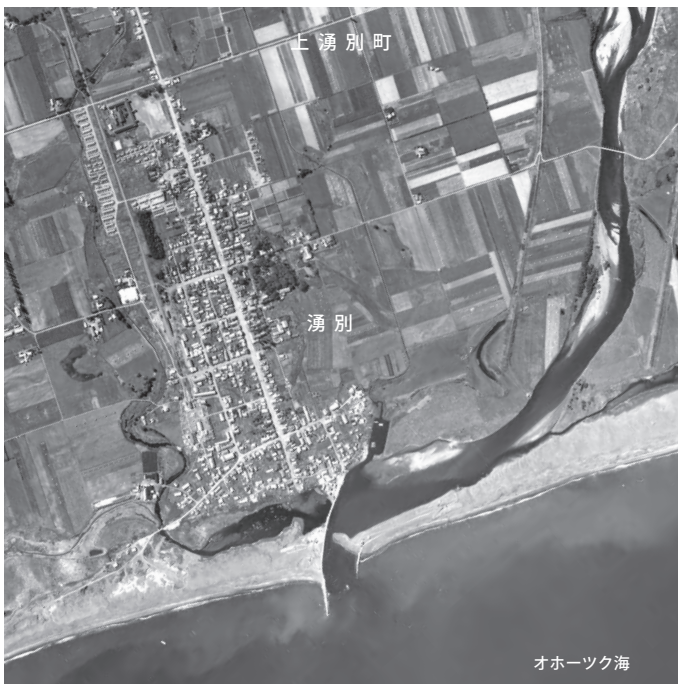


1964年9月撮影

渚滑川（しょこつがわ）は、流域面積 1,240km²、幹線流路延長 84km を有する。北見山地の最高峰天塩岳の南側に源を発し、滝上町市街より上流で多くの溪流を合わせ、滝上町市街から紋別市上渚滑にかけては、台地を深く切り込んだ溪谷となっており、その後、紋別市西部を北に流下し、オホーツク海に注いでいる。



網走開発建設部 撮影 (2002年)



1964年9月撮影

湧別川 (ゆうべつがわ) は、流域面積 1,480km²、幹線流路延長 87 kmを有する。北見山地の天狗岳に源を発し、遠軽町市街より上流では溪流河川、これより下流では激しく蛇行しながら北に流路を向け流下し、湧別町でオホーツク海に注いでいる。河口部は、導流堤 (S. 49年竣工) の東側に漁港が整備されるなど大きく変貌を遂げている。

常呂川 4

北海道



網走開発建設部 撮影 (2002年)



1974年7月撮影

常呂川（ところがわ）は、流域面積 1,930km²、幹線流路延長 120km を有する。大雪山系の十勝、石狩、北見の分水嶺となる三国山に源を発し、置戸町市街より上流では山間溪流の自然河川、置戸町市街より下流から北見市、端野町までは瀬と淵が交互にみられながら東北東に向け流下し、これより下流は北よりに流路を向けゆるやかな流れで大きな蛇行を繰り返し、常呂町でオホーツク海に注いでいる。



網走開発建設部 撮影 (2002年)



1974年7月撮影

網走川（あばしりがわ）は、流域面積 1,380km²、幹線流路延長 115km、を有する。阿寒山系に源を發し、山間部を流下して津別町で平野部に出る。その後、津別川、美幌川等を合わせて美幌町を貫流し、女満別町において湛水面積 34.1km²の網走湖に入り、さらに北流して網走市街を流れてオホーツク海へ注いでいる。河口部は、左岸導流堤及び消波堤に囲まれた網走港が位置している。

留萌川 6

北海道



留萌開発建設部 撮影



1978年9月撮影

留萌川（るもいがわ）は、流域面積 270km²、幹線流路延長 44km を有する。北海道留萌市と小平町の境にあるポロシリ山に源を発し、幾つもの溪流を合わせながら、留萌市の中心を西北に流下し、大和田遊水地を通り留萌市街部で日本海に注いでいる。河口部左岸には留萌港が位置している。



石狩川開発建設部 撮影



1966年7月撮影

石狩川（いしかりがわ）は、流域面積 14,330km²、幹線流路延長 268km を有する。雪山系の石狩岳に源を発し、層雲峡に代表される渓谷を流下して上川盆地に至り、道北の拠点都市旭川市で忠別川、美瑛川等の支川を合わせ、神居古潭の狭窄部を下って石狩平野に入り、石狩平野に入ると雨竜川、空知川、幾春別川、夕張川、千歳川等の支川を集め、最後に札幌市の中心部を流れる豊平川を合わせ、石狩湾で日本海に注いでいる。河口部右岸には導流堤が整備されている。

尻別川 8

北海道



小樽開発建設部 撮影

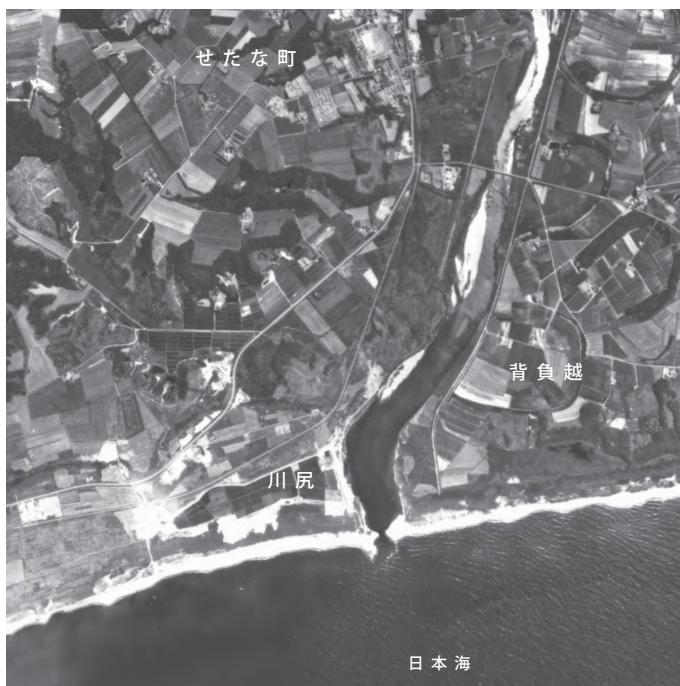


1966年9月撮影

尻別川（しりべつがわ）は、流域面積1,640km²、幹線流路延長126kmを有する。北海道南西部に位置し、支笏湖との分水界をなすフレ岳（標高1,048m）に源を発し、喜茂別川等の支川を合わせながら羊蹄山麓を流れ、蘭越町港で日本海に注いでいる。



函館開発建設部 撮影



1976年7月撮影

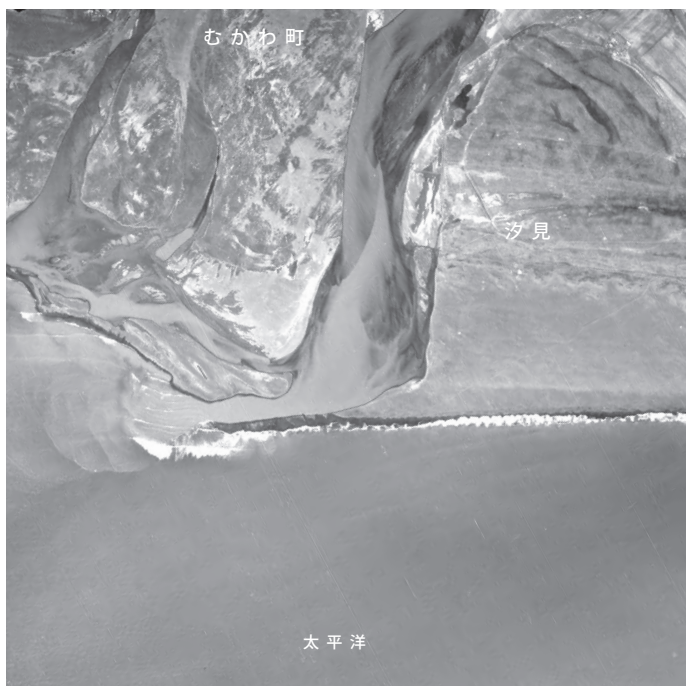
後志利別川（しりべしとしべつがわ）は、幹線流域面積720km²、流路延長80kmを有する。北海道の長万部岳の西部に源を発し、美利河ダムを経て檜山支庁管内を流れ、せたな町から日本海へ注いでいる。その流域は今金町の全域とせたな町の一部の2町で形成されている。流域一帯は、川の恵みで土壌が肥沃なうえ、気候も比較的温暖なため、明治以来、平野部を中心に農業を主体とした産業が発展してきている。

鵠川 10

北海道



室蘭開発建設部 撮影 (1999年)



1963年5月撮影

鵠川(むかわ)は、流域面積1,270km²、幹線流路延長135kmを有する。日高山脈北部のトマム岳に源を発し、占冠村の盆地において、パンケシュル川、双珠別川等を合わせ、赤岩青巖峡(あかいわせいがんきょう)、福山溪谷を流下し、穂別市街地で穂別川を合わせ、鵠川町で山峡の地を離れ、武川市街地を南西に流下し、太平洋に注いでいる。河口部に広がる干潟環境は、シギやチドリなどが飛来する渡り鳥の中継地として注目されている。



室蘭開発建設部 撮影 (1999年)



1963年5月撮影

沙流川（さるがわ）は、流域面積1,350km²、幹線流路延長104kmを有する。北海道沙流郡日高山脈に源を発し、千呂露川などを合わせ、日高町市街部を出てさらに渓谷を流下して平取町に入り、額平川などを合わせ、門別町において太平洋に注いでいる。上流部は切り立った渓谷で、中流になると河岸段丘となり、下流部は扇状地となっている。河口部の河道整備が進み、低水路は固定化されている。

釧路川 12

北海道



釧路開発建設部 撮影 (2006年)

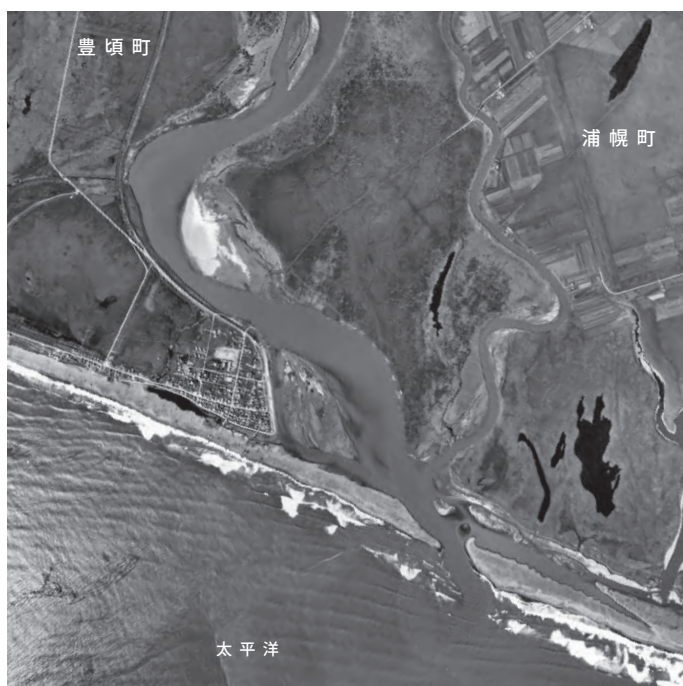


1967年5月撮影

釧路川（くしろがわ）は、流域面積2,510km²、幹線流路延長154kmを有する。屈斜路湖に源を発し、蛇行しながら緩流し、弟子屈町中心部を貫流して標茶町市街地付近で南西に転じ、釧路平野東部の緑を根室段丘に沿って流れ、釧路湿原を蛇行しながら南流し、釧路町の岩保木西麓から新釧路川を通して釧路市街を貫流し、釧路港より太平洋に注いでいる。



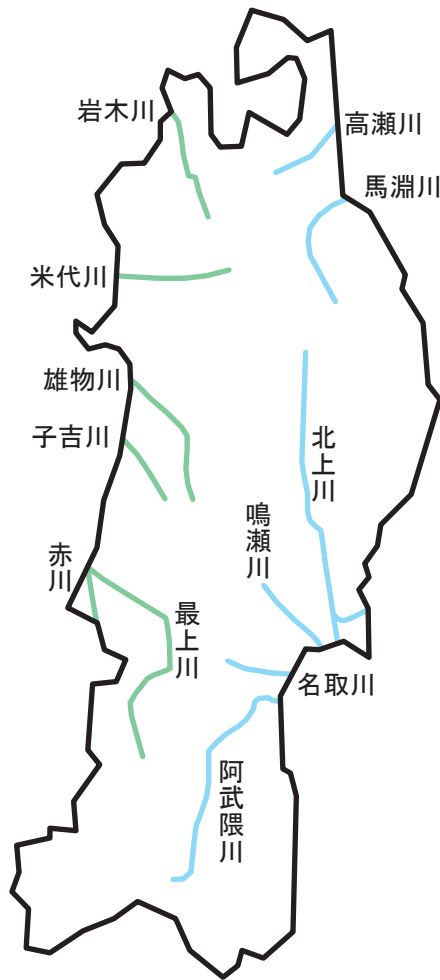
帯広開発建設部 撮影



1963年10月撮影

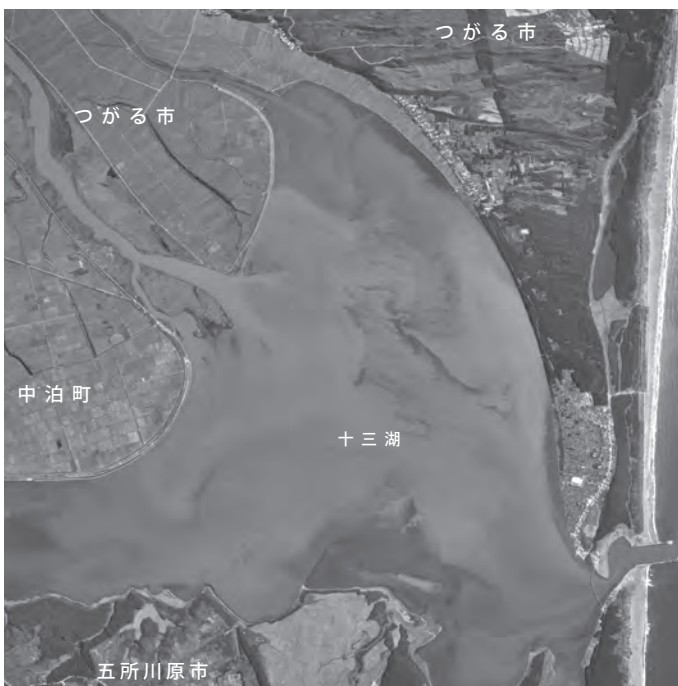
十勝川（とちかがわ）は、流域面積9,010km²、幹線流路延長156kmを有する。北海道の屋根、大雪山連峰十勝岳に源を発し、佐幌川、芽室川、美生川、然別川等を合わせて十勝地方の中心都市に達する。ここから水量も増大し音更川、札内川、士幌川、途別川、猿別川、さらに利別川等と合流しながら統内原野を直進して中川郡豊頃町大津において太平洋に注いでいる。近年の河道整備により、河口部の流路は変貌している。

東北





青森河川国道事務所 撮影



1969年9月撮影

岩木川（いわきがわ）は、流域面積 2,540km²、幹線流路延長 102km を有する。神山地の雁森岳（標高 987m）に源を発し、岩木山南麓を弘前市まで北東に流れ、弘前市から概ね北流に転じ、津軽平野を潤す。津軽半島西部を流れ、河口近くに十三湖を形成したのち日本海に注いでいる。

高瀬川 15

東北



高瀬川河川事務所 撮影 (2002年)

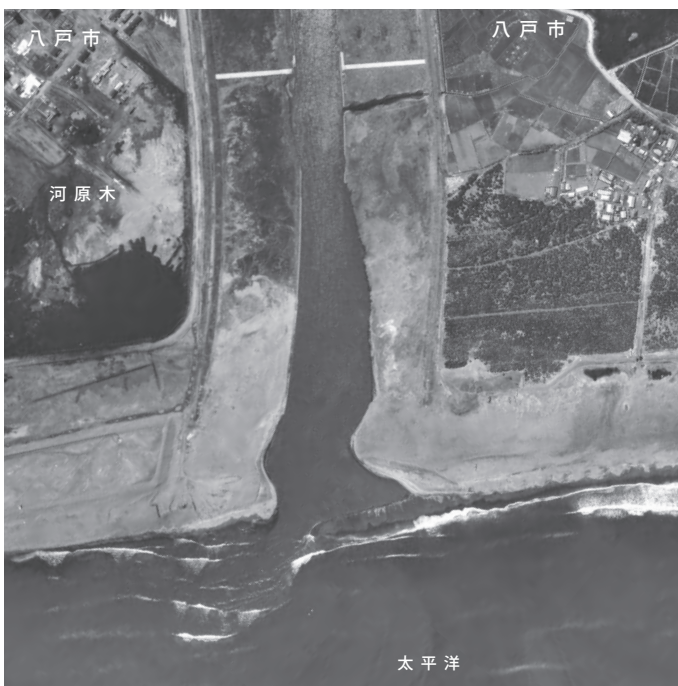


1963年6月撮影

高瀬川（たかせがわ）は、流域面積 867km²、幹線流路延長 64km を有する。青森県上北郡七戸町、奥羽山脈の八幡岳（標高 1,020m）東麓に源を発し、東流して和田川、作田川が七戸町で合流し、七戸川となる。その後、坪川、中野川を併せた辺りから高瀬川と呼ばれるようになる。三本木原北部を潤し、小川原湖南西部に流入する。さらに湖北東部から北東に流れ太平洋に注いでいる。下流部は低湿地のため、河口部に位置する小川原湖は汽水湖となっている。



青森河川国道事務所 撮影



1961年4月撮影

馬淵川（まべちがわ）は、流域面積 2,050km²、幹線流路延長 142km を有する。岩手県下閉伊郡と岩手郡の境にある袖山（標高 1,215m）に源を発し、高原状の北上山地と脊梁奥羽山脈の山隘を北流し青森県に至り、その流路を北東に転じ、八戸市を貫流して太平洋に注いでいる。河口部は、八戸港の埋め立て開発や都市化の進展により著しい変貌を遂げている。

北上川 17

東北



北上川下流河川事務所 撮影



1963年5月撮影

北上川(きたかみがわ)は、流域面積10,150km²、幹線流路延長249kmを有する。岩手県岩手郡岩手町の御堂にその源を発し、東側の北上高地と西側の奥羽山脈から流れ下る大小多数の支川を合わせ、盛岡市、北上市、奥州市、一関市などを通して岩手県のほぼ中央を北から南へと流れる。宮城県に入り、津山町柳津地先で旧北上川と分かれる。その後放水路を経て、石巻市相野谷字飯野川町で東へ向き追波湾に注いでいる。旧北上川はそのまま南流し石巻市市街を貫流して石巻湾に注いでいる。



北上川下流河川事務所 撮影



1961年5月撮影

鳴瀬川（なるせがわ）は、流域面積 1,130km²、幹線流路延長 89km を有する。宮城県北部を流れ、船形連峰の船形山（標高 1,500m）を源流として北流したのち、漆沢ダムを経て概ね東に流路を変える。中流域では大崎平野の南部を流れ、北側を並行して流れる江合川（荒雄川、北上川水系）と共に宮城県北部の穀倉地帯を成す。かつて鳴瀬川と江合川は流路が錯綜していたが、現在は新江合川が開削されるなど整備された。美里町東部から徐々に南東流に転じ、東松島市野蒜で石巻湾に注いでいる。

名取川 19

東北



国土地理院 撮影 (2006年)



1961年5月撮影

名取川（なとりがわ）は、流域面積 939km²、幹線流路延長 55km を有する。奥羽山脈の大東岳（標高 1,366m）に源を発し、上流域は溪谷で、二口温泉がある。秋保大滝を経てからは川にそって馬場、長袋、境野、湯元と細長い盆地が数珠繋ぎに連なる。秋保温泉はそのうちの湯元にある。仙台市の山田で仙台平野に出る。広瀬川をあわせ、仙台市を東流し、名取市平岡上で太平洋に注いでいる。河口付近で貞山運河と連絡し、北に井戸浦に通じる。もとは南の閑上漁港と広浦にも通じていたが、今では漁港が海に出口を設けたため遮断された。



仙台河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

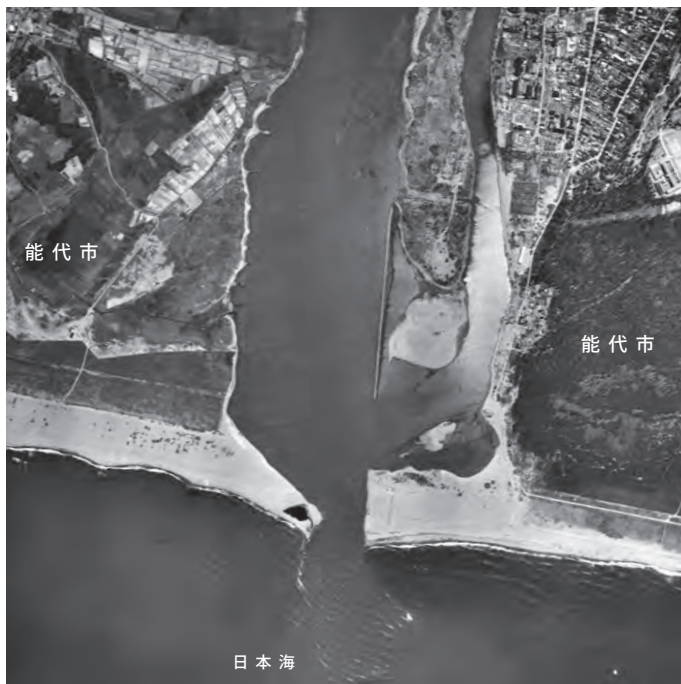
阿武隈川(あぶくまがわ)は、流域面積5,400km²、幹線流路延長239kmを有する。福島県、宮城県を流れ、福島県西白河郡西郷村の旭岳に源を発し、東流して白河市に入り西白河郡中島村付近で北に流れを変えると須賀川市、郡山市、福島市と県内を縦断するように流れ、宮城県伊具郡丸森町で角田盆地に入り、角田市を流れて仙台平野に出る。岩沼市と亶理町の境で太平洋に注いでいる。

米代川 21

東北



能代河川国道事務所 撮影



1963年5月撮影

米代川（よねしろがわ）は、流域面積4,100km²、幹線流路延長136kmを有する。秋田県北部を流れ、奥羽山地の中岳（標高1,024m）から南流する切通川と、八幡平北麓に源を発し、北流する兄川が岩手県八幡平市兄畑で合流し、米代川と名を変える。程なく秋田県に入り北流、鹿角市毛馬内からは概ね西流する。その後、大館市南部をかすめ、北秋田市（阿仁地方）を北流してきた阿仁川を二ツ井町で併せ、能代市で日本海に注いでいる。河口部左岸は、能代港と通じていたが今では港の出口を海に向けたため遮断された。



秋田河川国道事務所 撮影



1962年10月撮影

雄物川（おものがわ）は、流域面積は4,710km²、幹線流路延長約133kmを有する。山形県、宮城県との県境付近の大仙岳に源を発し、穀倉地帯である横手盆地を流れ、その後、神岡町から雄和町にかけて蛇行しながら流下する。秋田市において日本海へ注いでいる。秋田県の南半分を流域とする。かつては土崎港（秋田港）内に河口があった。大正から昭和にかけて洪水防止のための大改修が行われ、新たな放水路が昭和13年、現秋田市勝平地区に開削された。

子吉川 23

東北



秋田河川国道事務所 撮影



1962年8月撮影

子吉川（こよしがわ）は、流域面積1,190km²、幹線流路延長61kmを有する。秋田県鳥海町と山形県遊佐町の境にある鳥海山に源を発し、秋田県南部を流れ、鳥海山（標高2,236m）や丁岳山地（ひのとだけ山地）の三滝山（標高986m）、兜山（標高980m）等の溪流を集めて北西流、本荘平野の穀倉地帯を形成しつつ由利本荘市街西部で日本海に注いでいる。河口部右岸には、本荘マリーナ、本荘港が位置している。



酒田河川国道事務所 撮影



1962年10月撮影

最上川（もがみがわ）は、流域面積7,040km²、幹線流路延長229kmを有する。福島県との県境の吾妻山付近に源を發し、山形県中央部を北に流れ、新庄市付近で西に向きを変え酒田市で日本海に注いでいる。河口部右岸には、酒田港が位置しており、港口の出口は導流堤により海に向けている。左岸側に京田川が流入している。

赤川 25

東北



酒田河川国道事務所 撮影



酒田市

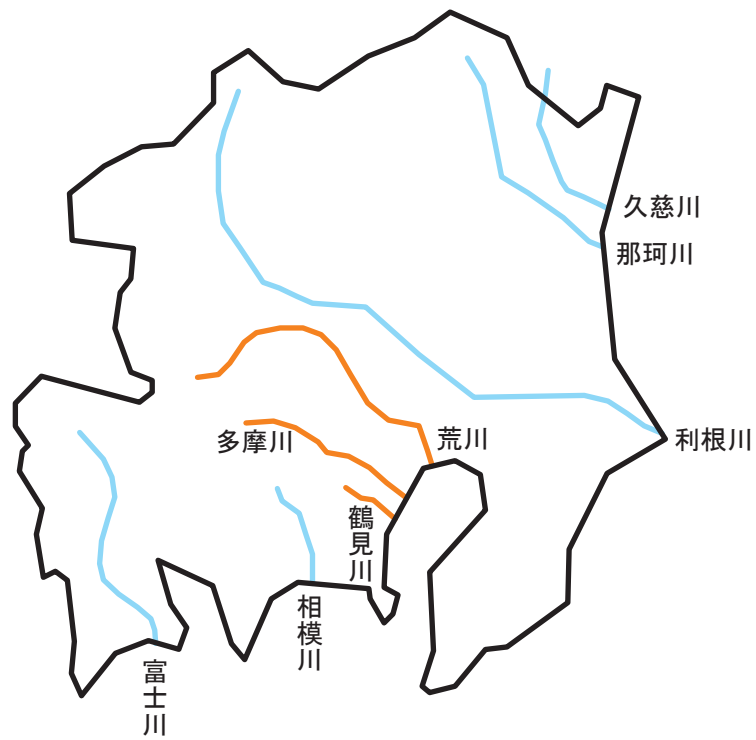
酒田市

日本海

赤川（あかがわ）は、流域面積 857km²、幹線流路延長 70km を有する。山形県、新潟県境の朝日山系以東岳付近に源を発し、大島池を経て溪谷を流れる大島川と田麦川を支川にもつ梵字川の 2 つの支川が合流する。その後、庄内平野を北流し、内川、青竜寺川、大山川等の支川と合流し、鶴岡市、三川町を通り、酒田市で日本海に注いでいる。

1962 年 9 月撮影

関東





常陸河川国道事務所 撮影



1961年7月撮影

久慈川（くじがわ）は、流域面積 1,490km²、幹線流路延長 124km を有する。福島県と茨城県の県境にある八溝山に源を発し、八溝山脈と阿武隈山脈の間を南に流れ、茨城県に入って大子町、常陸大宮市などを通り、日立市と東海村の境を通過して太平洋に注いでいる。河口部左岸の旧川は締切られ、日立港の埠頭が建設されている。

那珂川 27

関東



常陸河川国道事務所 撮影



1961年6月撮影

那珂川（なかがわ）は、流域面積3,270km²、幹線流路延長150kmを有する。栃木県那須町の那須岳に源を発し、南東から南に流れる。茨城県に入って水戸市などを通り、ひたちなか市と東茨城郡大洗町との境で太平洋に注いでいる。河口部は河口港として利用が盛んであったが、漁船の大型化により、左岸側に外港が建設（1971年）され導流堤に分断され現在のような形状となった。



利根川下流河川事務所 撮影

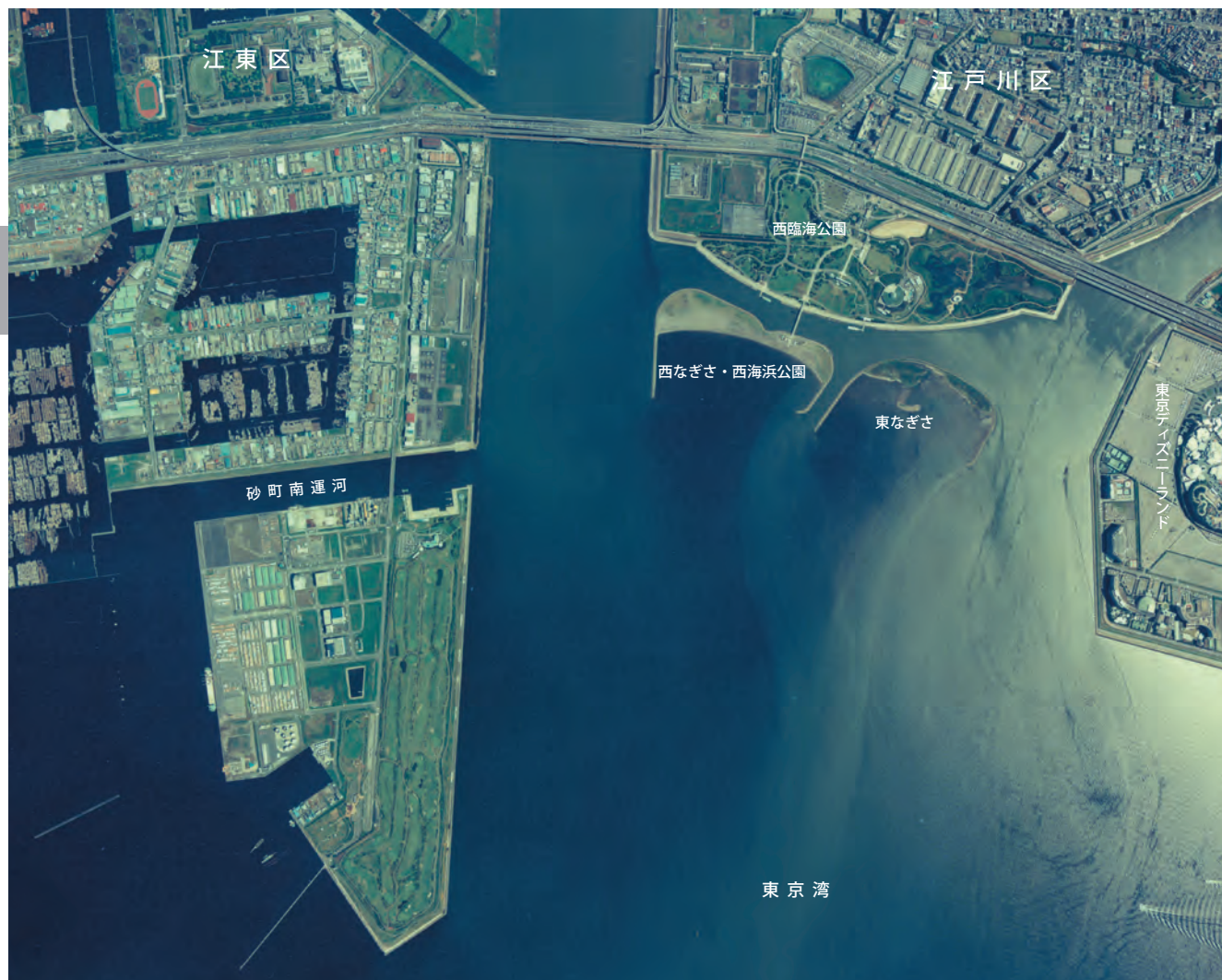


1961年7月撮影

利根川（とねがわ）は、流域面積 16,840km²、幹線流路延長 322km を有する。新潟県と群馬県の県境にある越後山脈の大水上山に源を発し、吾妻川（あがつまがわ）、烏川、渡良瀬川、鬼怒川など多数の川を合わせ、千葉県銚子市と茨城県神栖市の境で太平洋へ注いでいる。また、流れの一部は江戸川となり東京湾へと注ぐ。流域は群馬県、長野県、栃木県、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都の1都6県にまたがる。河口部は、左岸側からの砂州の伸長が著しく、右岸が岩礁であることによりみお筋が右岸側に固定されていた。砂州の伸長は、洪水の疎通、航路維持等において障害となることから、左岸に導流堤が施工され、河口幅を絞った現在の形状となった。

荒川 29

関東



国土地理院 撮影 (1997年)



1961年3月撮影

荒川（あらかわ）は、流域面積 2,940km²、幹線流路延長 173km を有する。埼玉県、山梨県、長野県の三県が境を接する甲武信ヶ岳（こぶしがたけ、奥秩父）に源を發し、秩父山地の水を集めながら秩父盆地まで東に流れる。秩父盆地から長瀨溪谷まで北に、その後東に流れて大里郡寄居町で関東平野に出る。熊谷市で南南東に向きを変え、川越市で入間川を併せる。戸田市近辺で再び東流、埼玉・東京の都県境を流れ、北区の新岩淵水門で新河岸川を併せ、隅田川を分ける。その後再び南流し江戸川区で東京湾に注いでいる。河口部は埋立が進み、左岸には葛西臨海公園の人工なぎさや右岸は若洲海浜公園が位置している。



京浜河川事務所 撮影



1961年3月撮影

多摩川（たまたがわ）は、流域面積 1,240km²、幹線流路延長 138km を有する。山梨県塩山市の笠取山に源を発し、丹波溪谷周辺の溪流を合わせながら東京都奥多摩湖に入る。途中秋川や浅川などの支川を合流させ東京都の2区24市町村、川崎市を流下し東京湾に注いでいる。河口部左岸には東京国際空港が位置しており、現在はさらに西側に拡大している。

鶴見川 31

関
東



京浜河川事務所 撮影



1961年7月撮影

鶴見川（つるみがわ）は、流域面積 235km²、幹線流路延長 43km を有する。東京都町田市上山田町に源を発し、多摩丘陵、川崎市、横浜市と流れ、真光寺川、麻生川、恩田川の支川と合流し、鶴見川多目的遊水地を通り、さらに烏川、早淵川、矢上川の支川と合流し、大きく蛇行しながら川崎市の一部および横浜市北部を貫き京浜工業地帯の鶴見区生麦で東京湾に注いでいる。



京浜河川事務所 撮影



1961年8月撮影

相模川（さがみがわ）は、流域面積 1,680km²、幹線流路延長 109km を有する。山梨県南都留郡山中湖村、富士五湖の一つでもある山中湖に源を発し、湖の標高は 981m。富士山北麓の水を集めながらまず北西に流れ、富士吉田市で北東に折れる。都留市を経て大月市で流路を東に変える。相模湖と津久井湖という二つのダム湖を経て、ゆるやかに進路を変え、厚木市からは南にまっすぐ下り、神奈川県中部を貫き平塚市、茅ヶ崎市の境付近で相模湾に注いでいる。河口部左岸に下水処理場、右岸に平塚新港が位置する。

富士川 33

関
東



国土地理院 撮影 (1999年)



1962年9月撮影

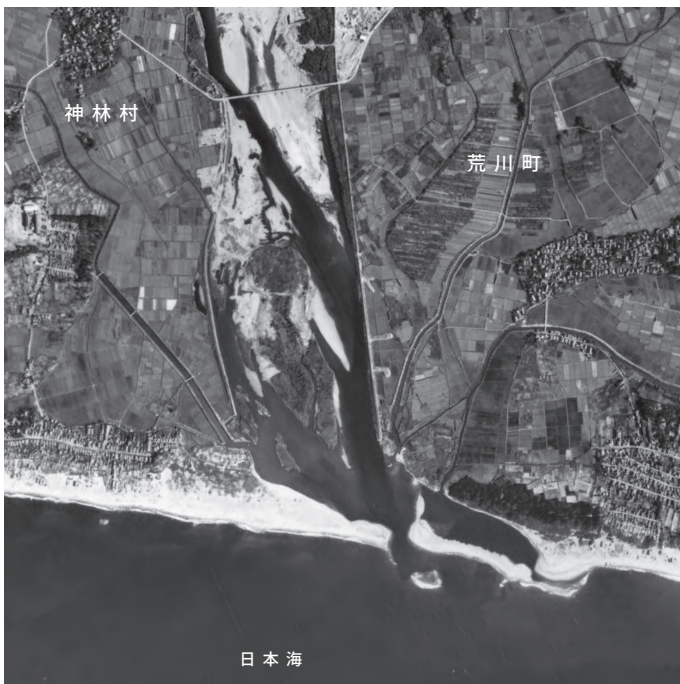
富士川（ふじかわ）は、流域面積 3,990km²、幹線流路延長 128km を有する。南アルプス北部、山梨県と長野県の県境に位置する鋸岳（のこぎりだけ）に源を発し、途中多くの支流をあわせ山間溪谷を抜け、北杜市から山梨県域に入って甲府盆地を南流する。笛吹川との合流点までは釜無川（かまなしがわ）と称される。市川三郷町と増穂町の町境で笛吹川と合流、ここから富士川の名で呼ばれる。さらにそのまま南流し、途中早川、さらに下って静岡県に入ると芝川などの支流を合わせ、雁堤の南で東海道と交差し、富士市と庵原郡蒲原町との境で駿河湾に注いでいる。

北陸





羽越河川国道事務所 撮影



神林村

荒川町

日本海

1965年10月撮影

荒川（あらかわ）は、流域面積1,150km²、幹線流路延長73kmを有する。山形県小国町の磐梯朝日国立公園内の大朝日岳（標高1,870m）に源を発し、南西に流れて小国盆地で流れを西に変え、飯豊山地に源を発する横川、玉川などの支流を合わせて新潟県に入り、関川村東部の狭窄部を流下しながら、平坦部に出て大石川、女川、鍬江沢川などの支流を合わせ、越後平野の北側を横断して胎内市桃崎浜で日本海に注いでいる。河口部右岸から堀川、左岸は鳥川、乙大日川が導流堤を隔て日本海に注いでいる。

阿賀野川 35

北
陸



阿賀野川河川事務所 撮影



1962年5月撮影

阿賀野川(あがのがわ)は、流域面積13,761km²、幹線流路全長210kmを有する。福島県と栃木県の県境付近、荒海山(1,581m)から流れ出る阿賀川(大川)に源を発し、日光街道に沿って北上し、猪苗代湖を源流とする日橋川と喜多方市塩川町会知地区付近で合流し西へ向きを変える。さらに尾瀬沼を源流とする只見川と喜多方市山都町三津合地区付近で合流する。新潟県に入ると阿賀野川と名を変え、東蒲原郡阿賀町津川で常浪川と、阿賀野市分田付近で早出川と合流、さらに新潟市満願寺付近で小阿賀野川と分流した後、新潟市松浜町付近で日本海に注いでいる。河口部左岸には新潟空港が位置している。



国土地理院 撮影 (1998年)



1962年5月撮影

信濃川（しなのがわ）は、流域面積 12,597km²、幹線流路延長 367km を有する。新潟県、群馬県、長野県を流れる。このうち信濃川と呼ばれている川は新潟県を流れる一級河川で、長野県に遡ると千曲川（ちくまがわ）と呼ばれる。千曲川は、埼玉県、山梨県、長野県の県境に位置する甲武信ヶ岳の長野県側斜面（南佐久郡川上村）を源流とし、信濃川は、十日町盆地を通過して越後平野（新潟平野）に出て群馬、新潟県境の谷川岳から流れてきた魚野川に合流、新潟市で日本海に注いでいる。河口部右岸には新潟西港が位置している。

関川 37

北
陸



高田河川国道事務所 撮影



1964年9月撮影

関川（せきかわ）は、流域面積1,149km²、幹線流路延長64kmを有する。焼山（標高2,400m）に源流を發し、妙高山南麓を東へ回り込むように流れた後、妙高山麓を東流して、野尻湖から發する池尻川を合わせ流路を北に転じ、山間部を流下した後、高田平野に出て、渋江川、矢代川等を合わせ、さらに河口付近で保倉川を合流して日本海に注いでいる。河口は保倉川と共有している。河口左岸側には導流堤が、右岸側には直江津港の防波堤が建設され現在の形状となっている。



高田河川国道事務所 撮影



1964年10月撮影

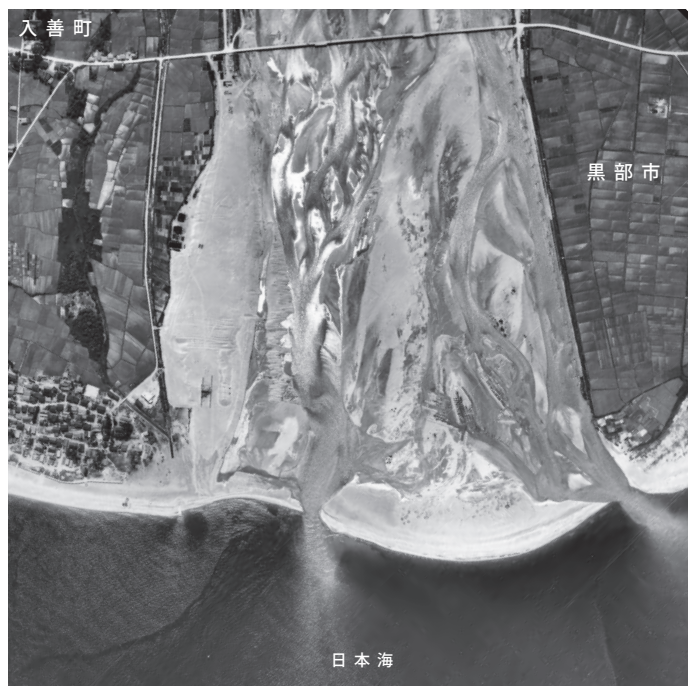
姫川（ひめかわ）は、流域面積 722km²、幹線流路延長 60km を有する。長野県大町市青木湖の北に源を発し、山間部を北流しながら、松川、中谷川等支流を合わせて新潟県糸魚川市に入り、大所川、根知川等の支流を合わせ、糸魚川市水崎地先で、日本海に注いでいる。

黒部川 39

北
陸



黒部河川事務所 撮影 (2001年)



1961年5月撮影

黒部川（くろべがわ）は、流域面積は682km²、幹線流路延長85kmを有する。富山県と長野県の境、北アルプスの鷲羽岳（わしばだけ）に源を発し、おおむね北へと流れる。川全体の8割は深い山地を縫うように流れ、3,000m級の山々が連なる立山連峰と後立山連峰の間に黒部峡谷を刻みながら流下し、黒部市宇奈月町で山地を抜けると、黒部川扇状地と呼ばれる大きな扇状地を北西に流下する。この扇状地は黒部市、入善町にかけて広がり、そのまま海中にまで広がっている。本流はそのまま途中、左岸の黒部市、右岸の入善町を経て富山湾に注いでいる。



富山河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

常願寺川（じょうがんじがわ）は、368km²、幹線流路延長56kmを有する。富山県と岐阜県、長野県との県境にそびえたつ標高3,000m級の山々の北アルプス立山連峰の北の俣岳（標高2,661m）を源にした真川と、立山三山の一つの浄土山（標高2,831m）に源を發し、土砂崩壊の激しい立山カルデラを流れる湯川とが樺平（かんばだいら）付近で合流し、常願寺川と名を変え、さらに千寿ヶ原で称名川と合流して水量を増し、山峡の地を流れ、立山町岩峯寺付近からは扇状地を形成し、一部天井川となりながら富山平野にある富山市の東側を北流しながら富山湾に注いでいる。

神通川 41

北
陸



富山河川国道事務所 撮影

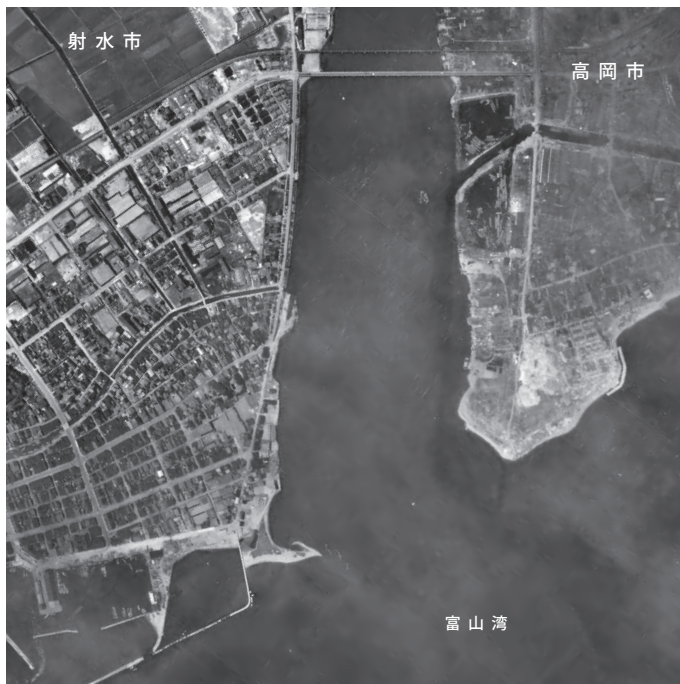


1961年5月撮影

神通川（じんずうがわ）は、流域面積 2,720km²、幹線流路延長 120km を有する。岐阜県飛騨地方の川上岳（かおれだけ：標高 1,626m）に源を発し、飛騨高地の中を進む。富山県境付近で高原川と合流し、富山市笹津付近で富山平野に出る。平野部では富山市のほぼ中央を貫流し、富山湾に注いでいる。河口東側に位置する富山港は、かつて河口港として利用されていたが、1937年に右岸導流堤により分離され、現在の形状となった。



富山河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

庄川（しょうがわ）は、流域面積 1,180km²、幹線流路延長 115km を有する。岐阜県高山市南西部、旧荘川村の山中峠（1,375m）の湿原に源を発し、御母衣湖、白川村を経て北上、富山県に入る。富山県内では五箇山、庄川峡を抜け利賀川と合流したのち、庄川扇状地の東端、高岡市と砺波市の東側、新湊市の西側を北流し富山湾に注いでいる。

小矢部川 43

北
陸



富山河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

小矢部川（おやべがわ）は、流域面積 667km²、幹線流路延長 68km を有する。石川県との県境の大門山（標高 1,572m）に源を発し、山峡の地を離れ砺波平野に出た小矢部川は、東側に位置する庄川扇状地の扇端と西側にある山々との間を曲がりくねり、数々の支川と合流しながら、砺波市から小矢部市、高岡市を経て富山湾に注いでいる。河口部は庄川の河口と隣接しており内川で繋がる。



金沢河川国道事務所 撮影



白山市

能美市

日本海

1963年4月撮影

手取川（てどりがわ）は、流域面積 809km²、幹線流路延長 72km を有する。石川県白山市の霊峰白山（標高 2,702 m）に源を発し、尾添川、大日川、その他の支川を合流して白山市鶴来大国町付近に至り、旧鶴来町市街地で流路を西へ変更し、山から金沢平野へ抜ける地点を扇頂とした扇状地を形成している。石川県の誇る穀倉地帯である加賀平野を西流し、能美市と能美郡川北町の境界を流れ、旧美川町で日本海に注いでいる。河口部には北陸自動車道が横断している。

梯川 45

北
陸



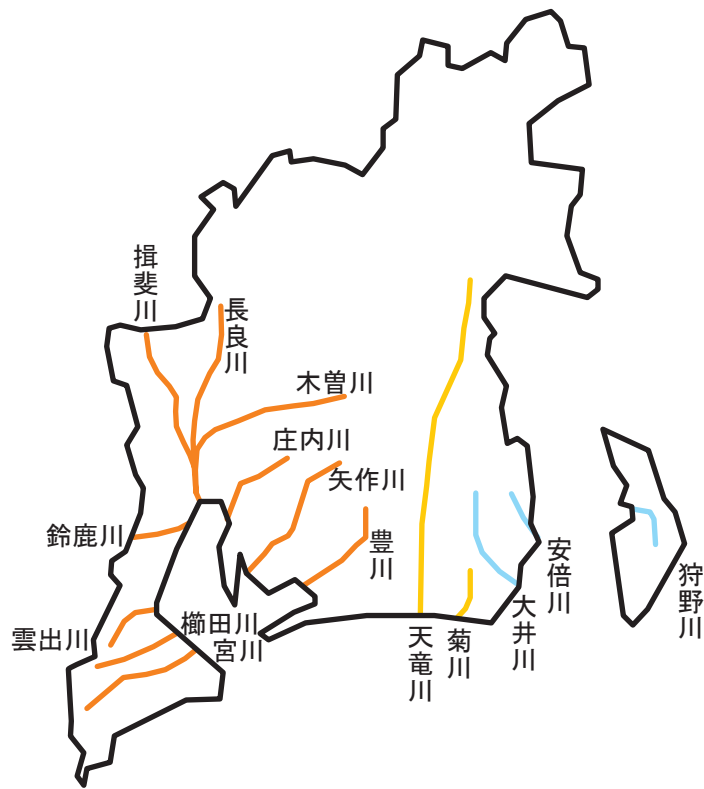
金沢河川国道事務所 撮影



1963年7月撮影

梯川（かけはしがわ）は、流域面積 271km²、幹線流路延長 42km を有する。白山山系大日山連峰の鈴ヶ岳（標高 1,174m）に源を発し、大杉谷と通称される山間部を北流して能美・江沼丘陵に入り、東より郷谷川、滓上川、仏大寺川を合流しながら流れを西に転じて平野部に入り、北から鍋谷川、八丁川が合流、河口近くで木場潟から流れ出る前川が南より合流して日本海に注いでいる。

中部





沼津河川国道事務所 撮影



1962年9月撮影

狩野川（かのがわ）は、流域面積 852km²、幹線流路延長 46km を有する。伊豆半島の最高峰、天城山に源を發し、伊豆半島中央部の大見川等の支川を合わせながら、大仁町から田方平野に出て、途中伊豆長岡町で狩野川放水路を分派し北に流れ、箱根山等を源とする来光川、大場川を菰山町、函南町にて、富士山等を源とする柿田川、黄瀬川を三島市、清水町にて合わせ沼津市において駿河湾に注いでいる。河口部右岸は沼津港が位置している。

安倍川 47

中
部

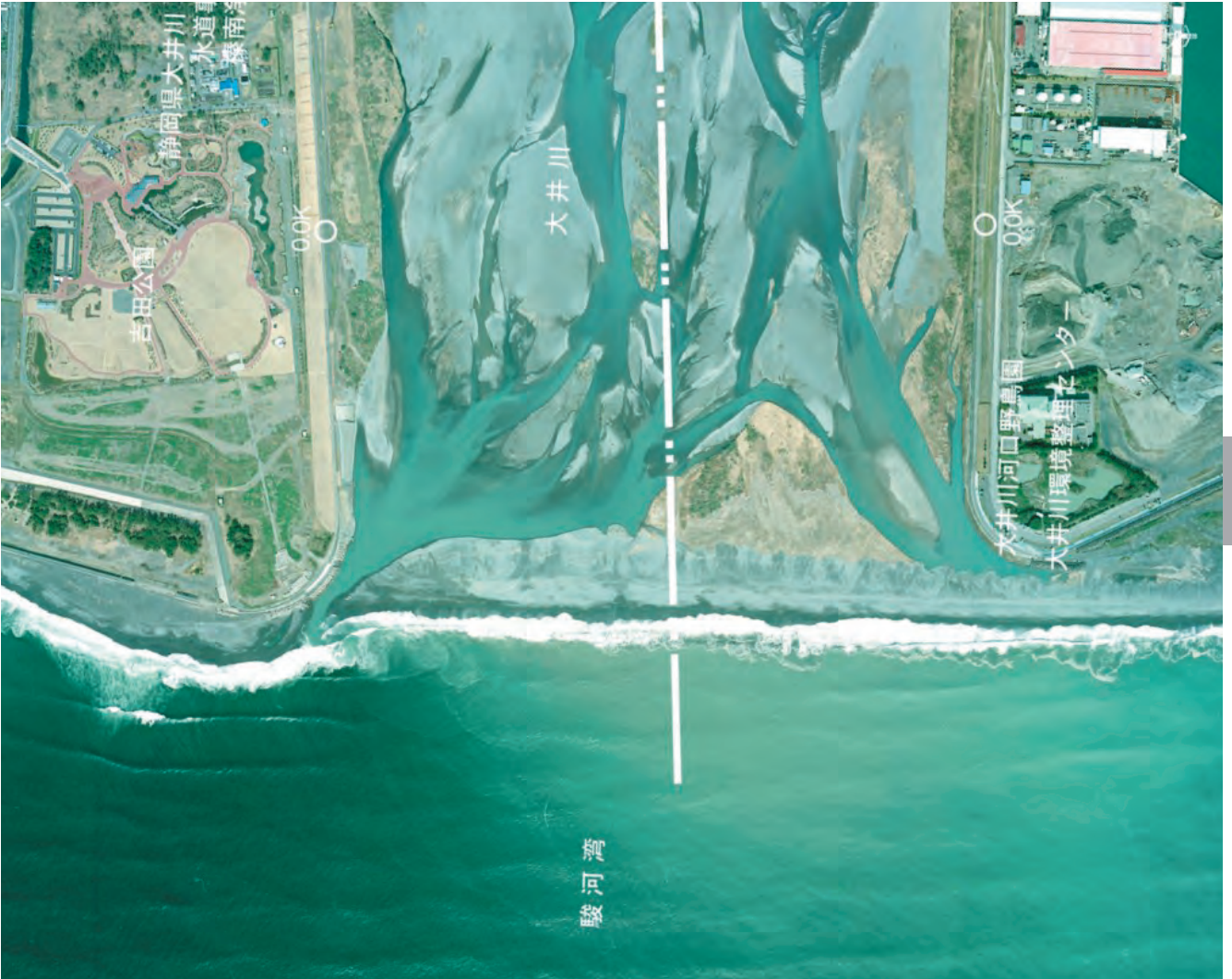


静岡河川事務所 撮影

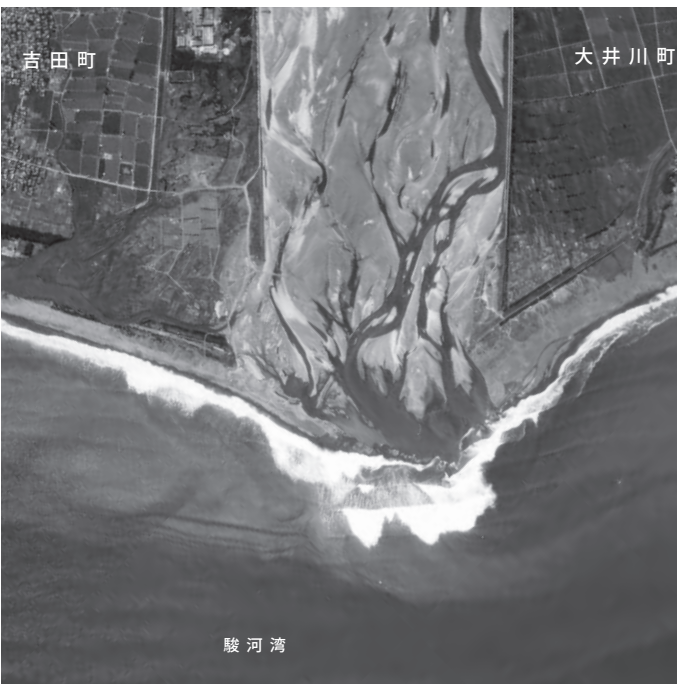


1962年7月撮影

安倍川（あべがわ）は、流域面積 567km²、幹線流路延長 51km を有する。同県と山梨県との境にある、大谷嶺、八紘嶺、安倍峠に源を発し、途中多くの溪流を合わせながら、静岡市の中山間部で支川中河内川、平野部で支川藁科川と合流し、静岡市街地を南に流下し、下流部では静岡市街地の西側を流れ、駿河湾に注いでいる。河口部右岸から丸子川が合流している。



静岡河川事務所 撮影



1962年7月撮影

大井川（おおいがわ）は、流域面積 1,280km²、幹線流路延長 168km を有する。南アルプス南部、静岡県、長野県、山梨県の県境付近間ノ岳に源を發し、途中多くの溪流を合わせながら、静岡県島田市金谷町で山峡の地を離れ、以後、島田市、藤枝市、金谷町を南に流下し、大井川町、吉田町にて駿河湾に注いでいる。

菊川 49

中部



浜松河川国道事務所 撮影

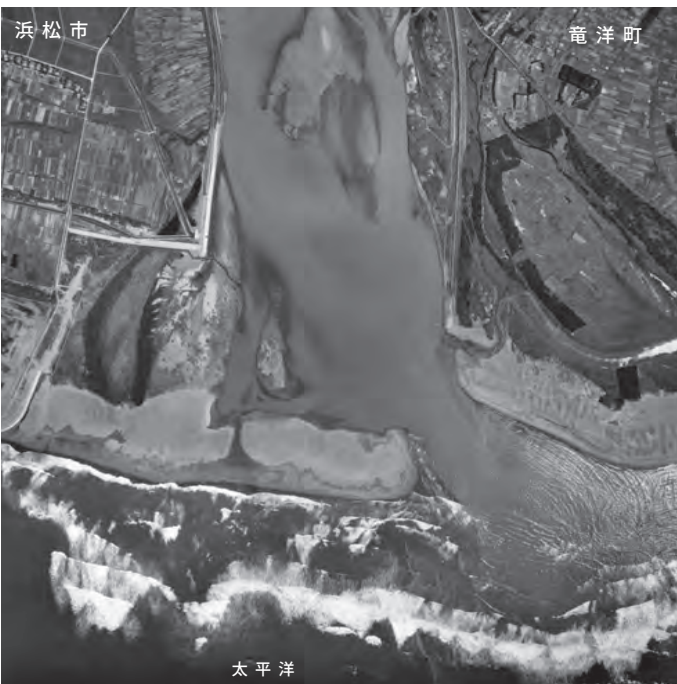


1962年8月撮影

菊川（きくがわ）は、流域面積 158km²、幹線流路延長 28km を有する。静岡県金谷町と掛川市の境にある粟ヶ岳に源を発し、菊川町、小笠町の低平地で支川を集めながら流れ、大東町地先で牛渕川と合流後、遠州灘に注いでいる。河口とも掛川市にあるが、途中菊川市の中心部を縦断する。24 の支川とともに菊川水系を構成している。



浜松河川国道事務所 撮影



1962年8月撮影

天竜川(てんりゅうがわ)は、流域面積5,090km²、幹線流路延長213kmを有する。長野県の諏訪湖に源を発し、南アルプスと中央アルプスから流れる支川を集めながら伊那谷を流れ、飯田市の天竜峡より山間部に入り、佐久間ダムなど発電ダム、天竜市鹿島地先を過ぎると浜松市二俣町鹿島で平野部を経て、浜松市と磐田市との境を成しつつ遠州灘に注いでいる。

豊川 51

中部



国土地理院 撮影 (2005年)



1961年5月撮影

豊川（とよがわ）は、流域面積724km²、幹線流路延長77kmを有する。愛知県設楽町段戸山（標高1,152m）に源を発し、愛知県東部の山間部を流れ、宇連川と合流した後、豊橋平野に流れる。豊川市行明町で豊川放水路と分流し、大きく蛇行しながら豊橋市市街北部を流れ三河湾（渥美湾）に注いでいる。河口部で豊川放水路と合流する。全国でも屈指の清浄な水質の川である。又、東三河地域における水瓶ともなっている。



国土地理院 撮影 (2006年)



1968年11月撮影

矢作川（やはぎがわ）は、流域面積 1,830km²、幹線流路延長 118km を有する。長野県の中央アルプス南端の大川入山（標高 1,908m）に源を発し、愛知県、岐阜県境の山岳地帯を流れて、巴川を合流して三河平野に出て、岡崎市で乙川を合流し、河口から 12km 付近で矢作古川と分派して、碧南市と西尾市との境で三河湾に注いでいる。

庄内川 53

中
部



庄内川河川事務所 撮影



1961年5月撮影

庄内川(しょうないがわ)は、流域面積1,010km²、幹線流路延長96kmを有する。岐阜県恵那郡山岡町にある夕立山に源を發し、岐阜県東濃地方の盆地を貫流し、山間部(玉野溪谷)を急流となって流下し、その後、愛知県春日井市附近より濃尾平野に出て支川を合わせて名古屋市北部で新川を分派し、その下流で矢田川と合流し、名古屋市の北西部を迂回しながら伊勢湾に注いでいる。



木曾川下流河川事務所 撮影

長良川

揖斐川



1962年3月撮影

木曾川（きそがわ）は、流域面積9,100km²、幹線流路延長229kmを有する。長野県木曾郡木祖村の鉢盛山（標高2,446m）に源を発し、木曾谷として名高い渓谷を中山道に沿って南南西に下って岐阜県に入り、飛騨川などと合流し、愛知県犬山市で濃尾平野に出て、南西に流下し、長良川と背割堤を挟み併流南下し、伊勢湾に注いでいる。木曾川は、いわゆる木曾三川の一つで、木曾川、長良川、揖斐川の河川からなり、古来は、この三川は、一つの川として乱流していたが、江戸時代以降何度となく改修工事が繰り返され、三川を分流利現在の河状となった。

鈴鹿川 55

中
部



三重河川国道事務所 撮影



1966年8月撮影

鈴鹿川（すずかがわ）は、流域面積 323km²、幹線流路延長 38km を有する。滋賀県との県境を成す鈴鹿山脈の那須ヶ原岳（標高 800m）東麓に源を発し、途中多くの溪流を合わせながら、関町で山間の地を離れ、その後安楽川を合わせ、亀山市、鈴鹿市の中心を東北に流下し、鈴鹿市地先の河口より 5km の地点で鈴鹿川派川を分派したのち、内部川を合わせ塩浜地先で伊勢湾に注いでいる。



三重河川国道事務所 撮影

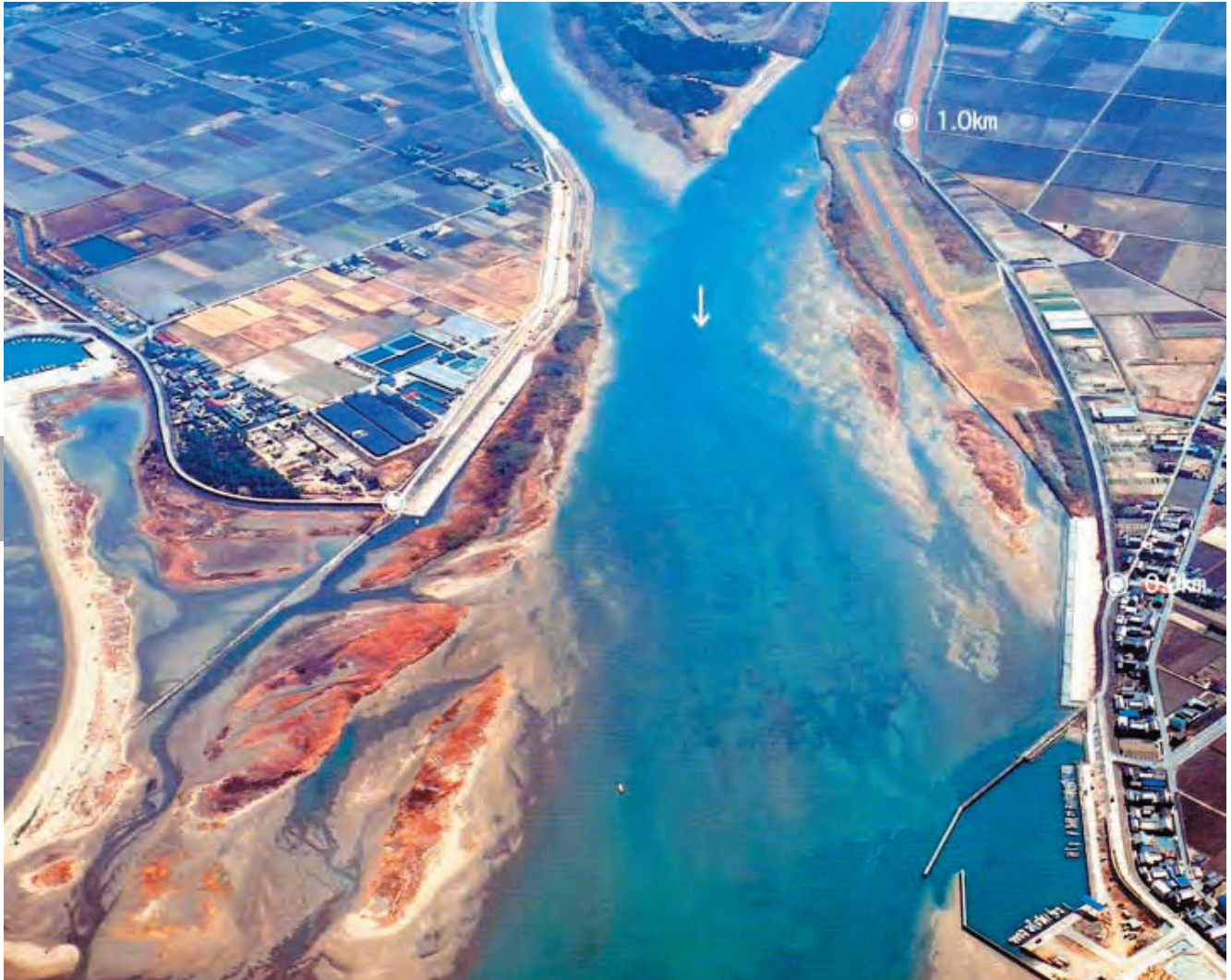


1961年8月撮影

雲出川（くもずがわ）は、流域面積550km²、幹線流路延長55kmを有する。三重県と奈良県の県境付近にある三峰山に源を発し、途中多くの溪流を合わせながら、白山町で山間の地を離れ、伊勢平野に出て、一志町、久居市内の田園地帯を東に流下し、波瀬川、中村川を合わせ、香良洲町の手前で雲出古川を分派し伊勢湾に注いでいる。

櫛田川 57

中
部



三重河川国道事務所 撮影



1961年8月撮影

櫛田川（くしだがわ）は、流域面積436km²、幹線流路延長87kmを有する。三重県飯高町と奈良県東吉野村の境にある高見山に源を発し、蓮川をはじめ多くの支川や溪流を合わせながら東流し、伊勢平野に出て佐奈川を合わせた後、松坂市法田で祓川を分派し、流路を北に転じ田園地帯を通過して松世崎、浦新田地先で伊勢湾に注いでいる。



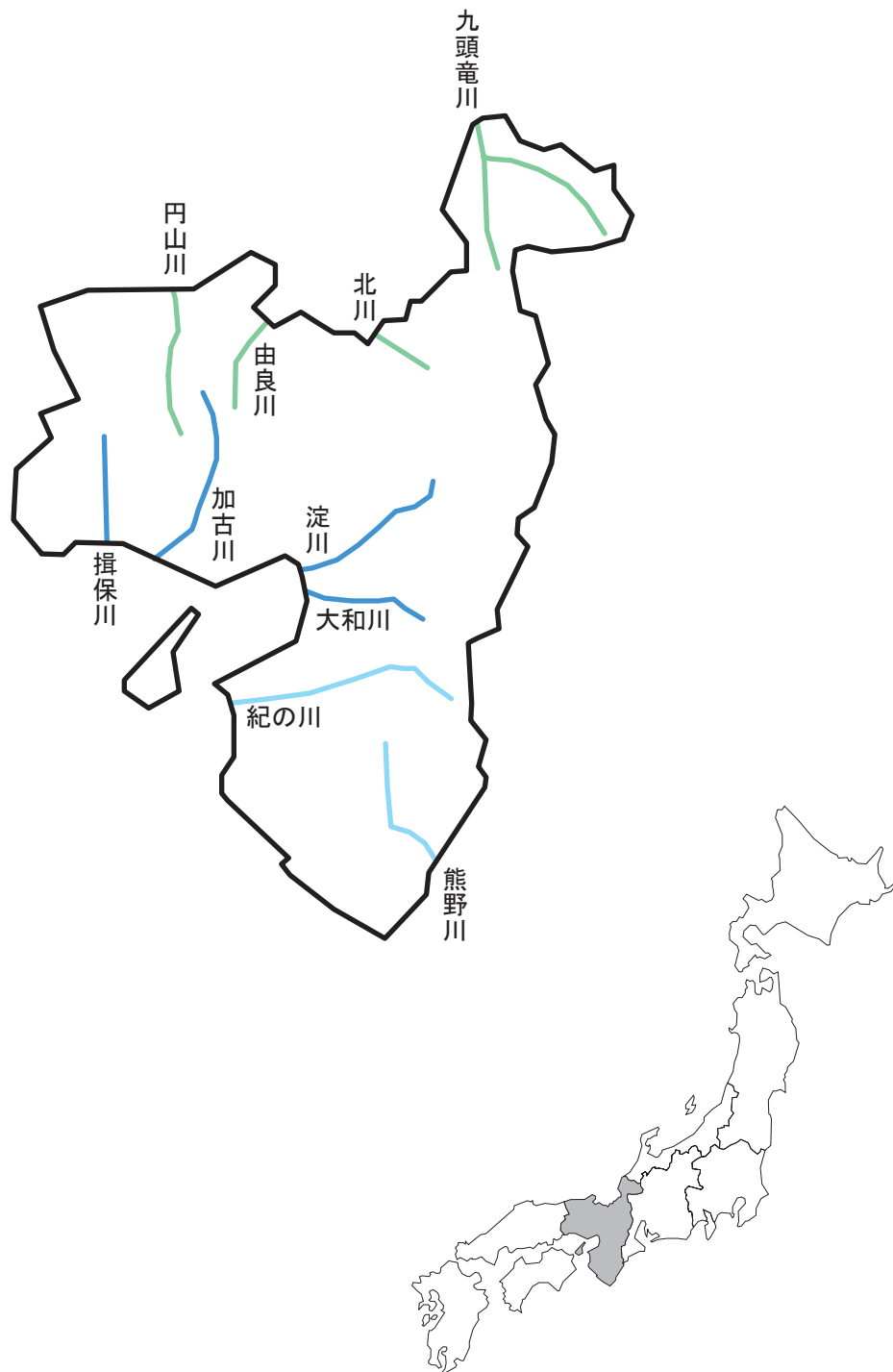
三重河川国道事務所 撮影



1961年8月撮影

宮川（みやがわ）は、流域面積920km²、幹線流路延長91kmを有する。三重県宮川村と奈良県上北山村の境にある日出ヶ岳にその源を発し、大内川などの支川と合流しながら、北東に流れ、度会町で山間の地を離れ伊勢平野に出て、伊勢市、御園村内を北東に流下し東豊浜町、大湊町の境で伊勢湾に注いでいる。

近畿





福知山河川国道事務所 撮影



1963年7月撮影

由良川（ゆらがわ）は、流域面積 1,880km²、幹線流路延長 146km を有する。三京都・滋賀・福井の府県境にある国岳（標高 959m）に源を発し、南丹市から西流。途中綾部市などを流れ、福知山市で徐々に北東へと流れを転じ、舞鶴市と宮津市の市境において日本海に注いでいる。河口の宮津市由良は、かつては由良川水運の港として栄え、森鴎外の『山椒太夫』のモデルになったといわれる。河口近くで北近畿タンゴ鉄道（KTR）宮津線が渡河する。

淀川 60

近畿



国土地理院 撮影 (2006年)



1964年6月撮影

淀川（よどがわ）は、流域面積8,240km²、幹線流路延長75km²を有する。日本最大の湖「琵琶湖」に源を発し、上流部では瀬田川、中流部では宇治川と呼ばれ、京都府、大阪府境界付近で桂川、木津川と合流した後は淀川となり、大阪市をはじめとする近畿圏の中心部を貫き大阪湾に注いでいる。河口部左岸は埋立てが進み、工場用地、コンビナート等の土地利用が活発である。



大和川河川事務所 撮影



1964年5月撮影

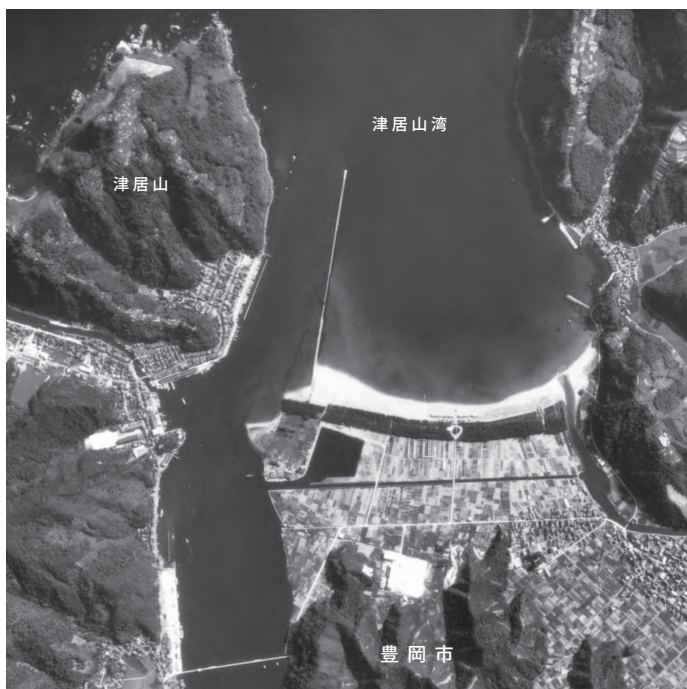
大和川（やまとがわ）は、流域面積 1,070km²、幹線流路延長 68km を有する。奈良県桜井市の北東部、貝ヶ平山（かいがひらやま、標高 822m）近辺に源を発し、上流部では初瀬川と称され、奈良盆地を西に向かって流れつつ、佐保川、曾我川、葛城川、高田川、竜田川、富雄川など盆地内の大半の河川を生駒山系の手前までに合わせる。生駒山系と葛城山系の間を抜けて、大阪平野に出ると柏原市で南河内を流れてきた石川と合流して真直ぐ西へと流れ、大阪市と堺市の間で大阪湾に注いでいる。河口部は埋め立てが進み、工場用地、コンビナート等の土地利用が活発である。

円山川 62

近畿



豊岡河川国道事務所 撮影



1964年8月撮影

円山川（まるやまがわ）は、流域面積1,305km²、幹線流路延長68kmを有する。兵庫県中部、旧播磨国の境界近く、朝来市生野町円山（標高641.1m）に源を発し、途中に大屋川、八木川、稲葉川、出石川および奈佐川等の95支川を合わせて但馬の中央部を北流して津居山湾で日本海に注いでいる。



姫路河川国道事務所 撮影



高砂市

加古川市

高砂湾

播磨灘

加古川（かこがわ）は、流域面積 1,730km²、幹線流路延長 96km を有する。兵庫県中部、但馬国と丹波国、播磨国三国が境を接する丹波市青垣町の粟鹿山（標高 962m）付近に源を発し、途中篠山川、杉原川、東条川、万願寺川、美囊川等を合わせながら滝野町、小野市、加古川市等を貫流し加古市と高砂市の境で瀬戸内海播磨灘に注いでいる。

1961年6月撮影

揖保川 64

近畿



姫路河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

揖保川（いぼがわ）は、流域面積810km²、幹線流路延長70kmを有する。兵庫県宍粟市の藤無山（標高1,139m）に源を発し、途中引原川、栗栖川、林田川等を合わせながら山崎町、新宮町、龍野市等を貫流し河口付近で中川を分脈して三角州を形成し、姫路市網干区で瀬戸内海播磨灘に注いでいる。河口部右岸は、工場、コンビナート等の土地利用が進んでいる。



和歌山河川国道事務所 撮影



1961年11月撮影

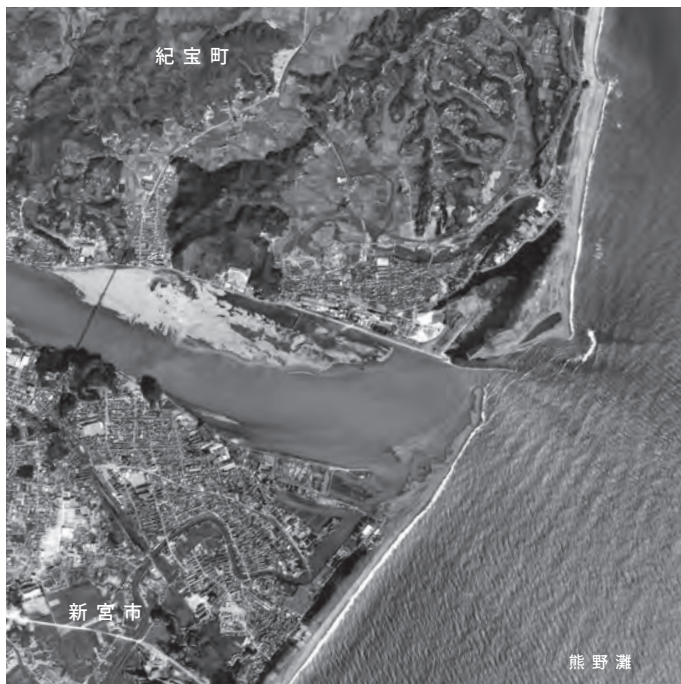
紀の川（きのかわ）は、流域面積 1,750km²、幹線流路延長 136km を有する。奈良県と三重県との県境にある大台ヶ原に源を発し、奈良県五條市付近からは中央構造線の南側を和泉山脈を右に見てほぼ真直ぐ西流し、和歌山市で紀伊水道に注いでいる。河口部左岸は導流堤を隔て和歌山港が位置する。

熊野川 66

近畿



紀南河川国道事務所 撮影



1966年9月撮影

熊野川（くまのがわ）は、流域面積2,360km²、幹線流路延長183kmを有する。1970年に一級河川の指定を受けた当初は新宮川（しんぐうがわ）であったが、地元では熊野川の呼称が定着しており、変更の要望が多かったため1998年4月9日、法定名称が熊野川と変更された。水系名は新宮川水系のままである。大峰山脈の雄峰である山上ヶ岳、稲村ヶ岳、大普賢岳の間に源を発し、奈良県内では十津川（とつかわ）と呼ばれる。五條市、十津川村などを南流し、本宮町萩で三越川を合流後、大日山、七越峯、富士根山、如法山等の山間を貫け、途中、大台ヶ原を水源とする北山川と合流、しばらく三重県との県境に沿って流れ、新宮市、紀宝町で熊野灘に注いでいる。



福井河川国道事務所 撮影 (2001年)



坂井市

坂井市

日本海

1962年5月撮影

近畿

九頭竜川(くづりゅうがわ)は、流域面積2,930km²、幹線流路延長116kmを有する。福井県と岐阜県の県境にある油坂峠(717m)に源を発し、九頭竜ダムを経て、大野盆地、勝山盆地を北西に進み、大野市と勝山市との境付近で左支川真名川を合わせ、永平寺町鳴鹿にて福井平野に入り、そこから西流し、福井市高屋において左支川日野川と合流し、流れを北西に転じ、坂井市三国町で日本海に注いでいる。河口部左岸には福井火力発電所が位置する。

北川 68

近畿



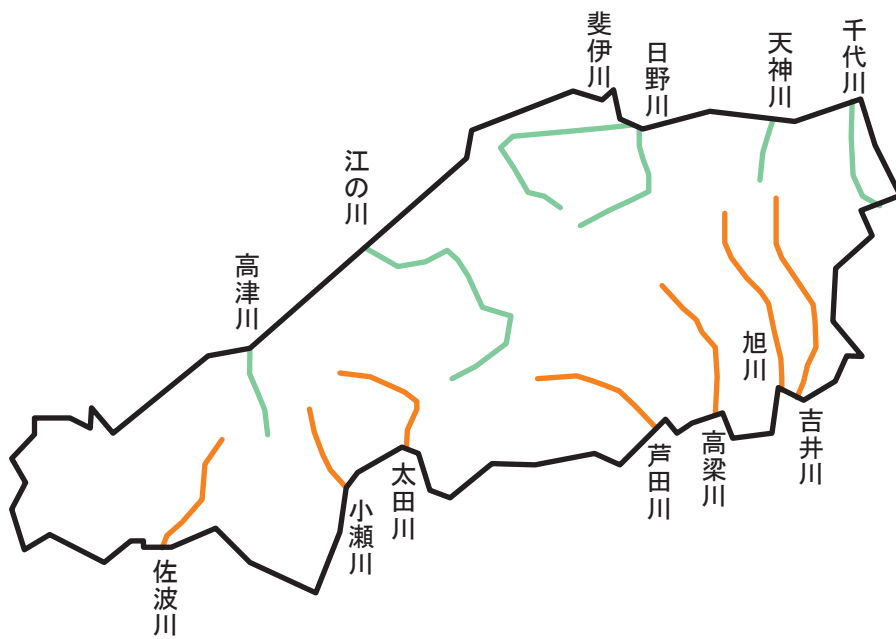
福井河川国道事務所 撮影



1963年5月撮影

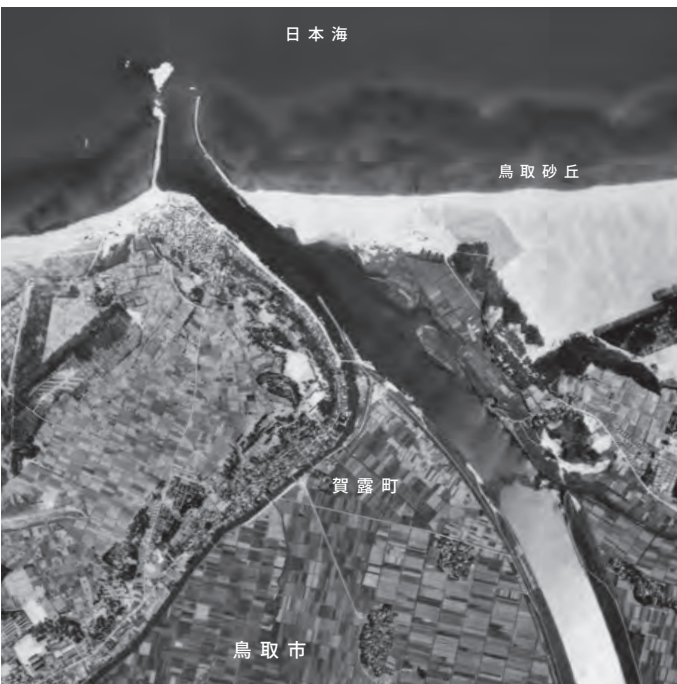
北川(きたがわ)は、流域面積211km²、幹線流路延長30kmを有する。滋賀県と福井県との境をなす野坂山地の三十三間山の東麓に源を発し、三重岳、武奈岳にさえぎられた滋賀県今津町の山間部を南流して、県境付近において左支川の寒風川(さむかぜがわ)を合わせ、流路を北西に転じ、若狭町にて右支川鳥羽川を、さらに小浜市東小浜にて左支川遠敷川(おにゅうがわ)を合わせ、福井県小浜市街地の小浜市城内と小浜市雲浜の境界から若狭湾に注いでいる。

中国





鳥取河川国道事務所 撮影



1964年5月撮影

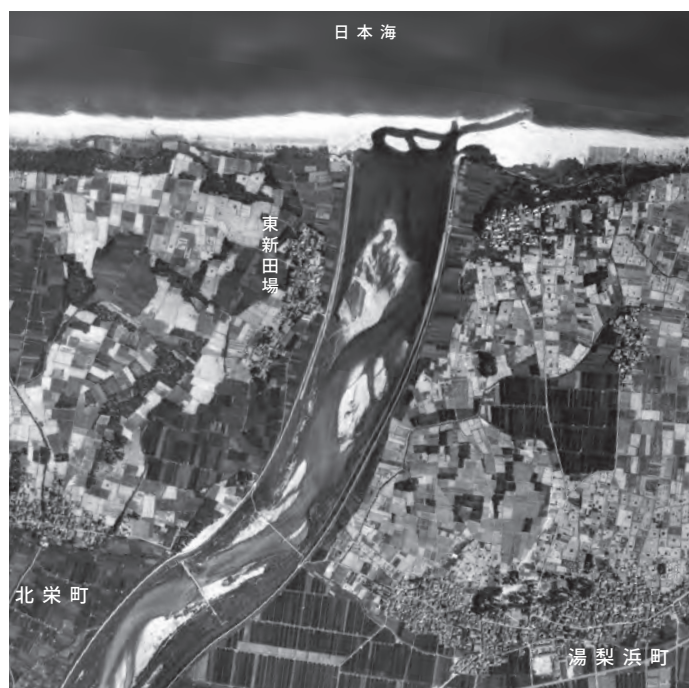
千代川（せんだいがわ）は、流域面積 1,190km²、幹線流路延長 52km を有する。鳥取県八頭郡智頭町の沖の山に源を発し、途中多くの支川を合わせながら北流し鳥取市で日本海に注いでいる。河口部左岸に鳥取港、右岸に鳥取砂丘が広がる。河口付近の河道は、以前は西側の鳥取港の位置を流れていたが、河口上流 4 km 区間の大きく湾曲していた河道は洪水対策事業に伴い、現在の位置に付け替えられた。

天神川 70

中
国



倉吉河川国道事務所 撮影 (2006年)



日本海

東新田場

北栄町

湯梨浜町

1962年5月撮影

天神川（てんじんがわ）は、流域面積 490km²、幹線流路延長 32km を有する。鳥取県東伯郡三朝町の津黒山（標高 1,118 m）に源を発し、福本川、加谷川、三徳川の小支川を合わせて北流し、倉吉市を経て、東伯郡湯梨浜町および北栄町で日本海に注いでいる。



日野川河川事務所 撮影 (2003年)



1962年5月撮影

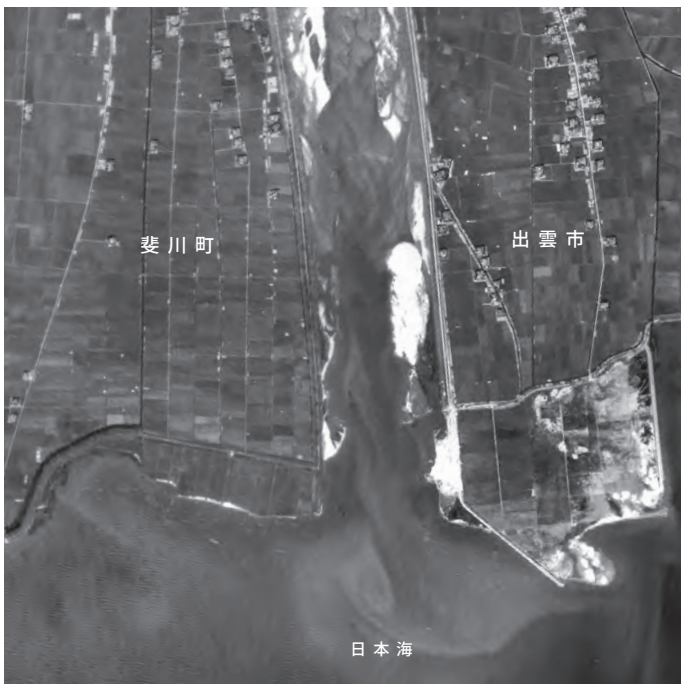
日野川（ひのがわ）は、流域面積870km²、幹線流路延長77kmを有する。鳥取県日野郡日南町の三国山（標高1,004m）に源を発し、東北東に向かって流れる。途中多くの溪流を合わせながら大山の麓にある江府町からは北北西に流路を変え、米子市および日吉津村の中心を北に流下し、西伯郡日吉津村で日本海に注いでいる。

斐伊川 72

中
国



出雲河川事務所 撮影（2006年）



1962年6月撮影

斐伊川（ひいかわ）は、流域面積2,070km²、幹線流路延長153kmを有する。島根県仁多郡奥出雲町の船通山に源を発し、途中、大馬木川、阿井川、久野川、三刀屋川、赤川等の支川を合わせながら北流し、出雲平野で流れを東に転じ、宍道湖、大橋川、中海を経て、鳥取県境港市および島根県松江市の境界から日本海に注いでいる。



浜田河川国道事務所 撮影 (2003年)



1964年10月撮影

江の川（ごうのかわ）は、流域面積 3,900km²、幹線流路延長 194km を有する。広島県山県郡北広島町の阿佐山に源を発し、本流は可愛川（えのかわ）と呼ばれる。途中多くの小支川を合わせながら盆地を北東に流れ、安芸高田市で八千代湖を経て、北部の三次市で同規模の馬洗川、西城川を三方向より合わせて西流し、河口まで中国山地をまたぎ、島根県江津市で日本海に注いでいる。

高津川 74

中
国



浜田河川国道事務所 撮影 (2003年)



1964年10月撮影

高津川（たかつがわ）は、流域面積1,090km²、幹線流路延長81kmを有する。山口県、島根県境に連なる中国山地に位置する島根県鹿足郡六日市町田野原に源を発し、北に流下しながら六日市町、柿木村、日原町を経て、益田市横田において本水系最大の支川匹見川を合わせ益田市を貫流し日本海に注いでいる。



国土地理院 撮影 (1995 年)



1961 年 7 月撮影

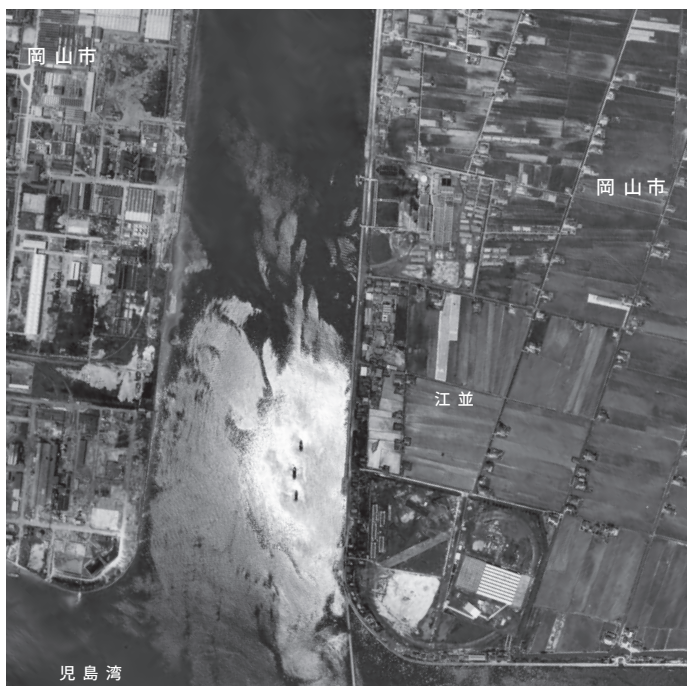
吉井川（よしいがわ）は、流域面積 2,110km²、幹線流路延長 133km を有する。岡山県苫田郡鏡野町の三国山（標高 1,252 m）に源を発し、津山市の市街地を東へよぎった後再び南流する。途中加茂川、吉野川、金剛川等を合流して和気町で南西流へと転じ、岡山市東部西大寺で児島湾に注いでいる。

旭川 76



岡山河川事務所 撮影

中
国

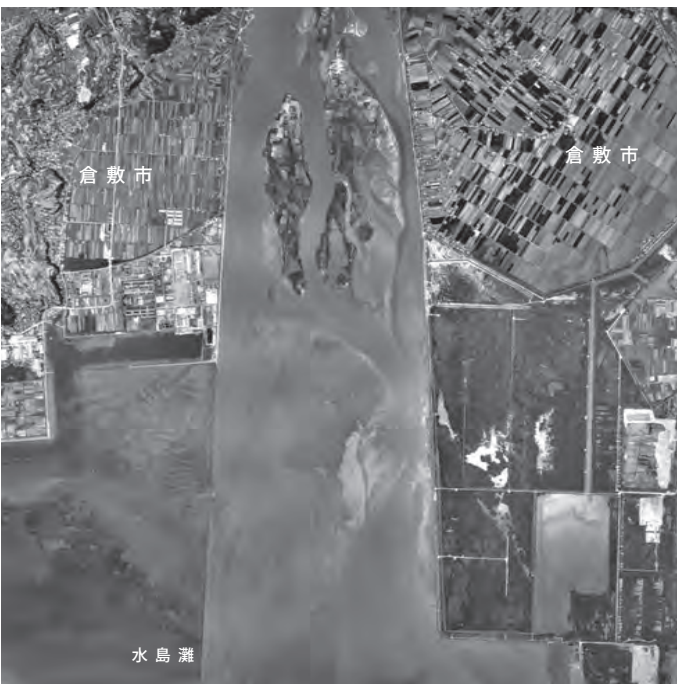


1961年7月撮影

旭川（あさひがわ）は、流域面積1,810km²、幹線流路延長142kmを有する。岡山県真庭市川上の朝鍋鷲ヶ山（標高1,081m）に源を発し、南流しながら途中、新庄川、備中川、宇甘川を合流し、岡山市の市街地東部を貫流し、児島湾に注いでいる。下流域はかつて干拓が盛んであった。現在は、市街化が進行している。



国土地理院 撮影 (1995年)



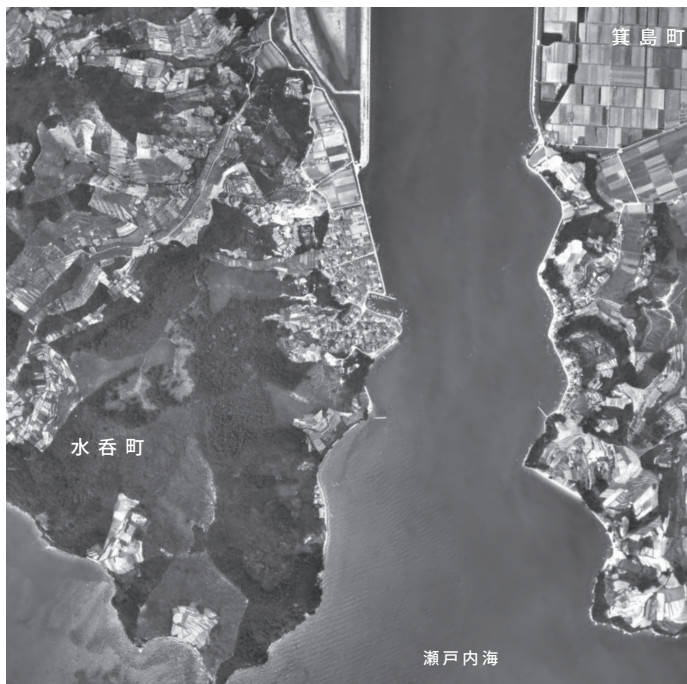
1963年6月撮影

高梁川 (たかはしがわ) は、流域面積 2,670km²、幹線流路延長 111km を有する。鳥取県境の明智峠 (標高 755m) に近い花見山 (標高 1,188m) の東麓 (新見市) を源流とし、途中西川、熊谷川、小坂部川等支川を合わせながら南流し、高梁市において広島県比婆郡の道後山から発する成羽川を合流する。さらに南下し倉敷市酒津において小田川を合わせ、倉敷平野を貫流し倉敷市で水島灘に注いでいる。河口部は埋立てが進み、工場、コンビナート等の土地利用が活発である。

芦田川 78

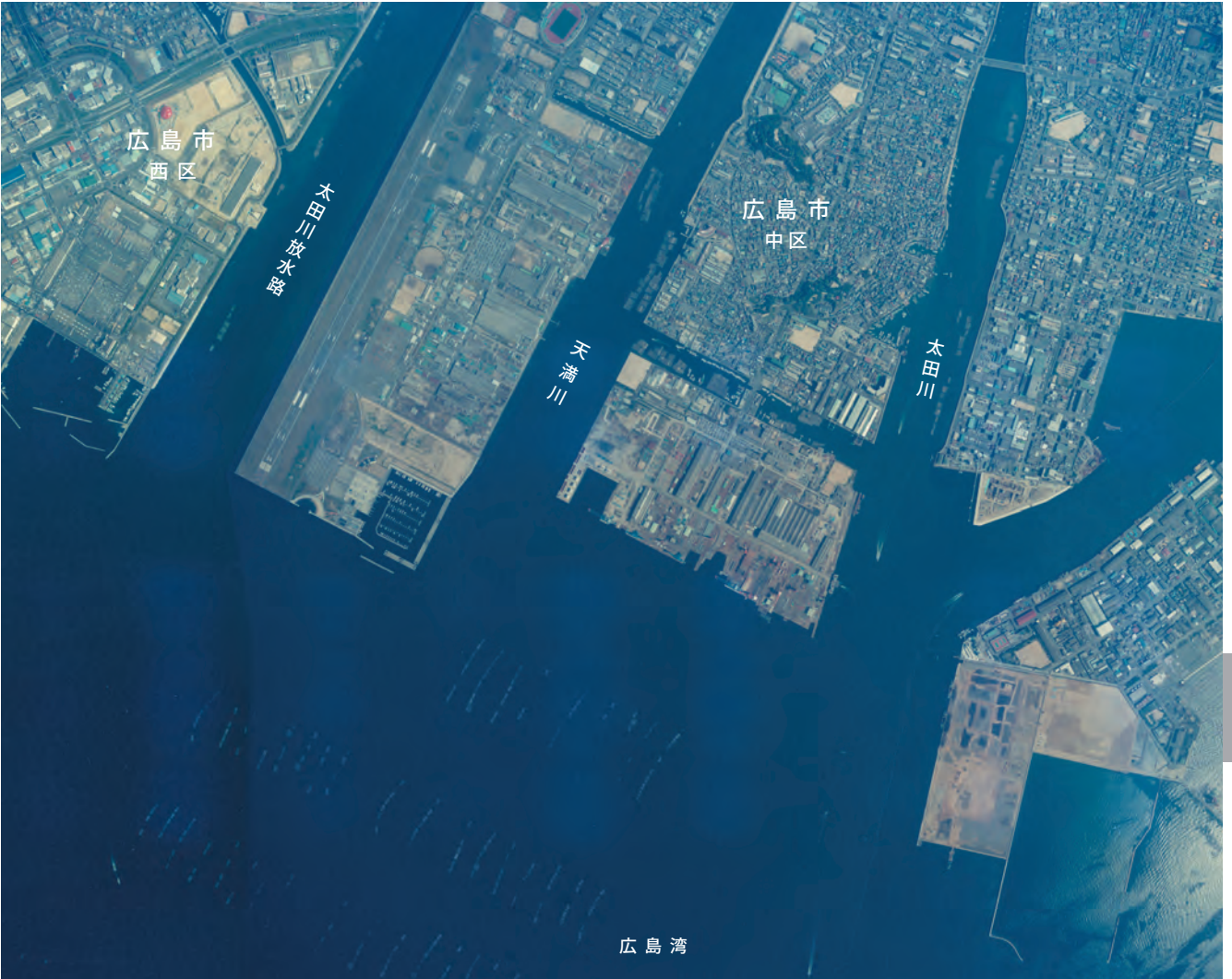


福山河川国道事務所 撮影



1961年5月撮影

芦田川（あしだがわ）は、流域面積 860km²、幹線流路延長 86km を有する。三原市大和町藏宗（標高 570m）に源を発し、世羅台地を貫流し、矢多田川、御調川等の支川を合わせ府中市に至り、その下流で神谷川、有地川、高屋川等を合わせ、神辺平野を流下し、さらに瀬戸川を合わせて福山市街の西を通って箕島町において瀬戸内海に注いでいる。河口部の芦田川河口堰は 1969 年に工事着手し、1981 年に竣工した。



国土地理院 撮影 (2001年)



1966年11月撮影

太田川（おおたがわ）は、流域面積 1,710km²、幹線流路延長 103km を有する。広島県廿日市市の冠山に源を発し、柴木川、筒賀川、滝山川、水内川等を合流し、広島市安佐北区可部付近で山峡の地を離れ、大毛寺川、三篠川、根谷川が合流する。高瀬堰下流で旧流路であった古川を分合流して広島市に至る。市内で太田川放水路と旧太田川（本川）に分流し、その後旧太田川は更に天満川、京橋川、元安川、猿猴川の計6本の川に分流し、広島デルタを形成しながら瀬戸内海に注いでいる。

小瀬川 80

中
国



瀬戸内海

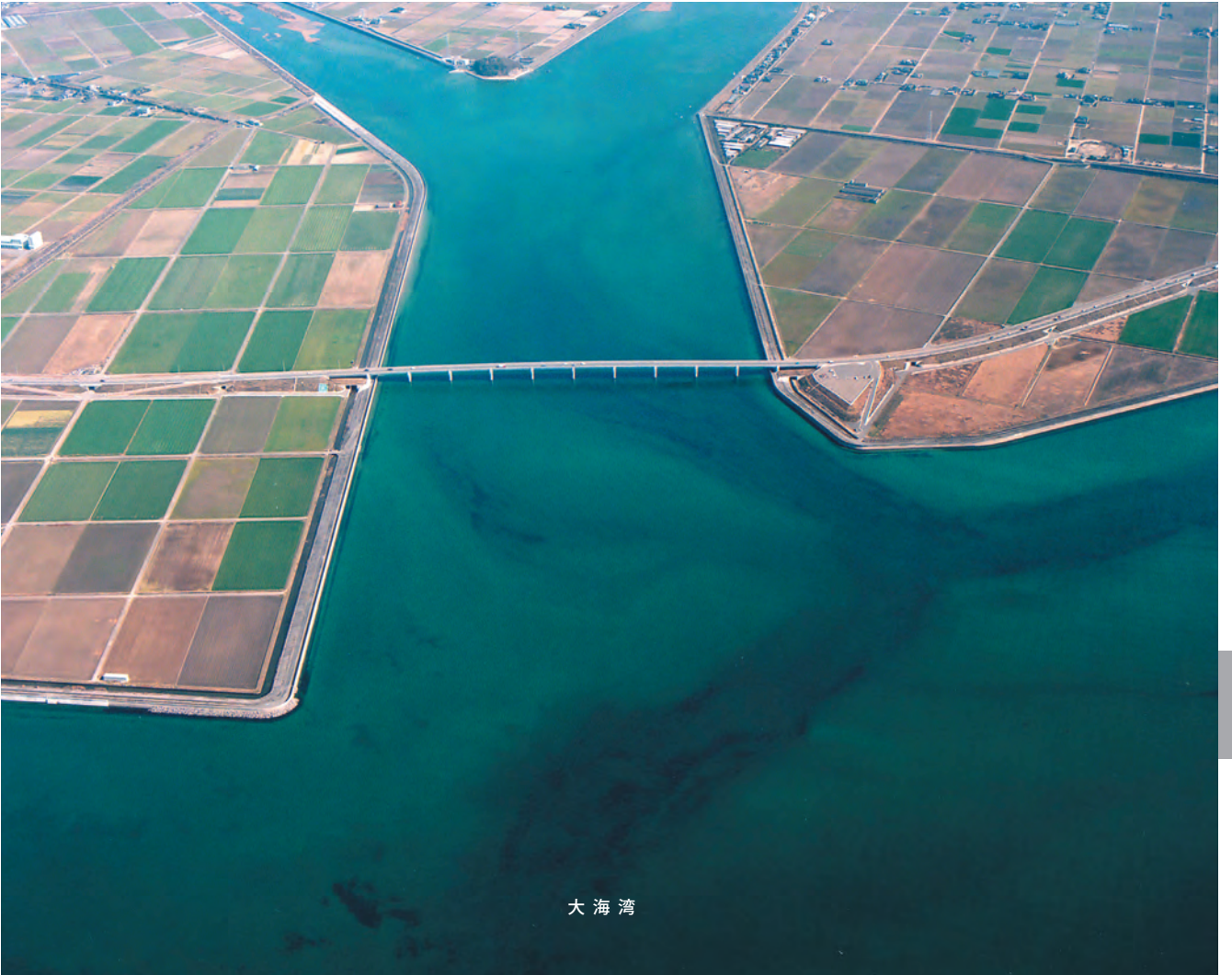
太田川河川事務所 撮影



瀬戸内海

1962年5月撮影

小瀬川（おぜがわ）は流域面積 340km²、幹線流路延長 59km を有する。廿日市市北西部の鬼ヶ城山（標高 1,031m）に源を発し、途中多くの溪流を合わせながら、廿日市市佐伯町市野付近から山口県境を南流し、途中渡ノ瀬川を合流し、弥栄ダムを経て、広島県大竹市および山口県和木町で瀬戸内海に注いでいる。



大海湾

山口河川国道事務所 撮影



1962年5月撮影

佐波川（さばがわ）は、流域面積460km²、幹線流路延長56kmを有する。山口県と島根県境に位置する周防山地の三ヶ峰（標高970m）に源を発し、ダム湖の大原湖を経て南流する。野谷川、三谷川、島地川等の支川を合わせ、中国自動車道と交差してからは南西流に転じ、防府市街北西部を流れ、河口より約1km上流左岸より横曽根川を合流し、大海湾に注いでいる。

四国





紀伊水道

徳島河川国道事務所 撮影



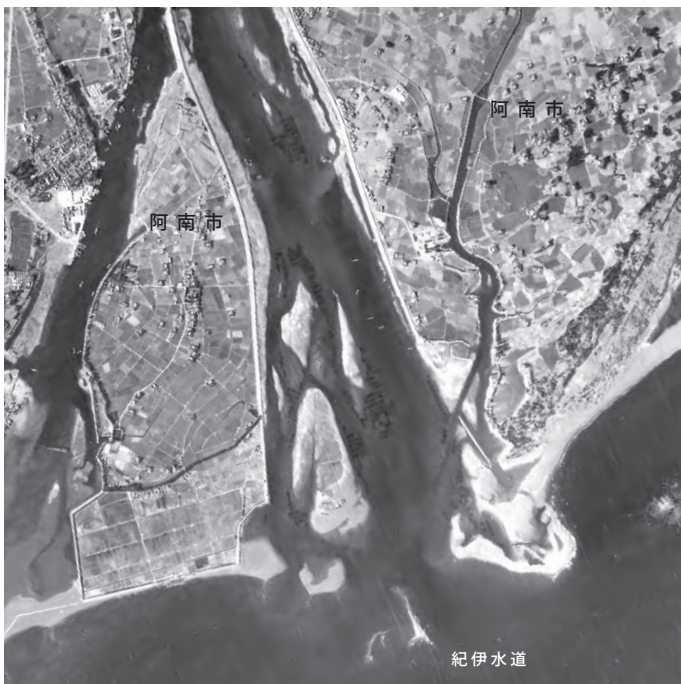
1961年5月撮影

吉野川（よしのがわ）は、流域面積は3,750km²、幹線流路延長194kmを有する。愛媛県西条市に頂を有する瓶ヶ森（標高1,896m）より湧き出る高知県吾川郡いの町の白猪谷に源を発し、四国山地の南側を東流、その後高知県長岡郡大豊町で向きを北に変え四国山地を横断する。三好市山城町で愛媛県新居浜市の冠山を源とする最長の支流、銅山川が合流し、三好市池田町の池田ダムで香川用水により香川県に分流、三好市池田町で再び東流し、徳島平野を貫流し、旧吉野川を分流、徳島市で紀伊水道に注いでいる。河口付近には、広い河川敷と中州が発達し、干潮時には大きな干潟が干出する。

那賀川 83



那賀川河川事務所 撮影



1962年2月撮影

那賀川（なかがわ）は、流域面積 874km²、幹線流路延長 125km を有する。徳島県那賀郡那賀町木頭北川の剣山南麓に源を発し、徳島、高知両県々界の山脈を東麓に沿って南下し、北東流に転じる中流域では著しく蛇行する。坂州木頭川、赤松川を合わせ、阿南市上大野において平野に出て下流域で再び東流し、紀伊水道に注いでいる。



国土地理院 撮影 (1997年)



1962年9月撮影

土器川（どきがわ）は、流域面積 140km²、幹線流路延長 33km を有する。香川県琴南町と徳島県三野町の境にある讃岐山脈に源を発し、国道 438 号に沿って山を下り、丸亀平野を北流して丸亀市土器町北と丸亀市富士見町の境界から瀬戸内海に注いでいる。河口部左岸は埋立てが進み工業団地、漁港、競艇場等の利用がなされている。

重信川 85



松山河川国道事務所 撮影

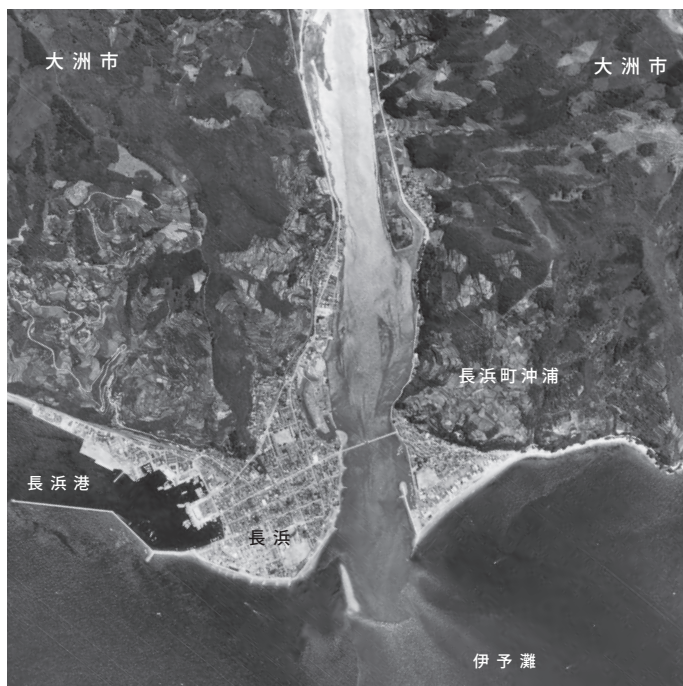


1962年5月撮影

重信川（しげのぶがわ）は、流域面積 445km²、幹線流路延長 36km を有する。高縄半島の東三方ヶ森（標高 1,233m）に源を発し、南西に流れて山地を脱し、松山平野（道後平野）をほぼ西流し、石手川など支流を合流しながら、松山市と伊予郡松前町との境界を流れ、伊予灘に注いでいる。



大洲河川国道事務所 撮影



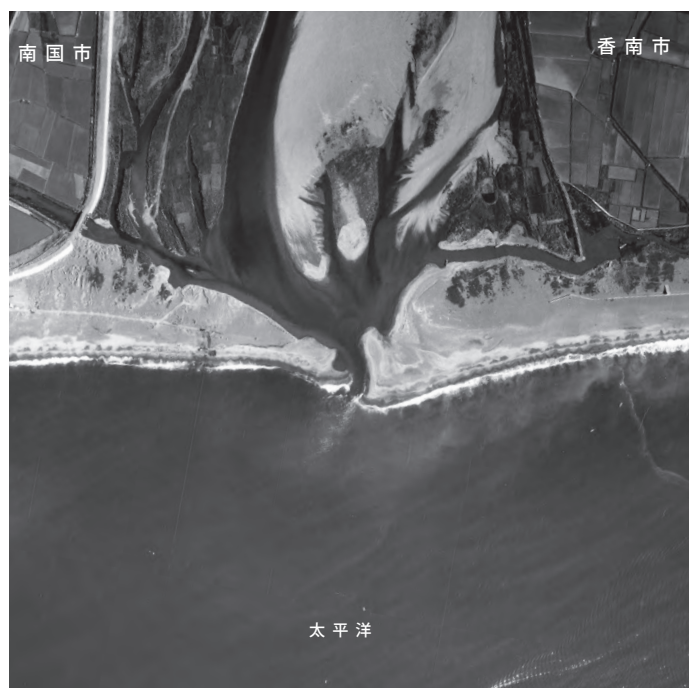
1964年5月撮影

肱川（ひじかわ）は、流域面積1,210km²、幹線流路延長103kmを有する。愛媛県西予市宇和町鳥坂峠に源を発し、南流し、西予市宇和町の南部で東向きを変え、西予市野村町坂石で黒瀬川、船戸川と合流し、北へと向きを変える。その後は河辺川、小田川等の支流を集め、山に挟まれた狭窄部を流れ、喜多郡那長浜町で伊予灘に注いでいる。河口部右岸には長浜港、左岸には沖浦漁港が位置している。

物部川 87



高知河川国道事務所 撮影

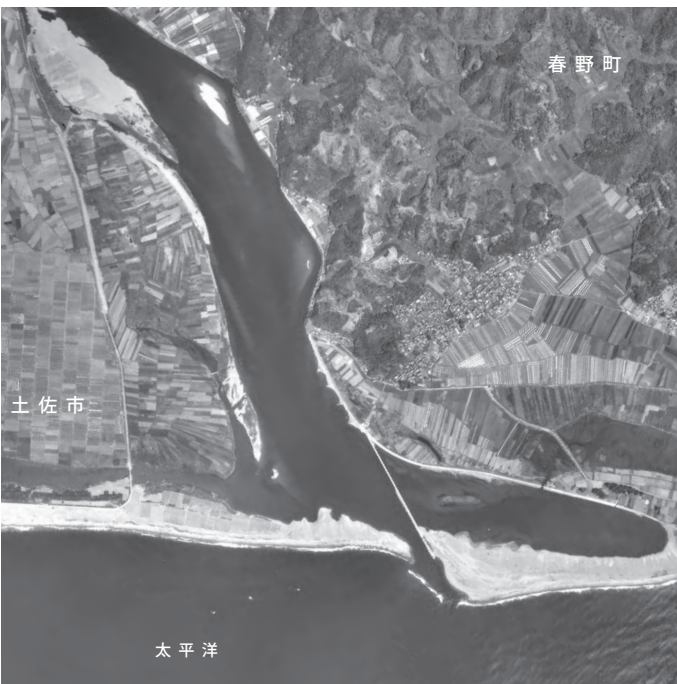


1962年5月撮影

物部川（ものべがわ）は、流域面積 508km²、幹線流路延長 71km を有する。剣山地の白髪山（しらがやま：標高 1,769.7m）に源を發し、山地に囲まれた峡谷をほぼ南西に流れ、土佐山田町で山地を離れたのち香長平野を南流し、土佐湾に注いでいる。河口部一帯は、多くの渡り鳥の移動時における中継地点となっている。河口部右岸には高知空港、左岸は吉川漁港が位置している。



高知河川国道事務所 撮影



1962年5月撮影

仁淀川（によどがわ）は、流域面積1,560km²、幹線流路延長124km²を有す。四国の最高峰である石鎚山（標高1,982m）に源を発し、愛媛県内を西南に流れた後東に向きを変えて高知県に入りいくつかの支流をあわせつつ南下し、吾南・高東平野を貫流して、土佐市付近で土佐湾へ注いでいる。

四万十川 89



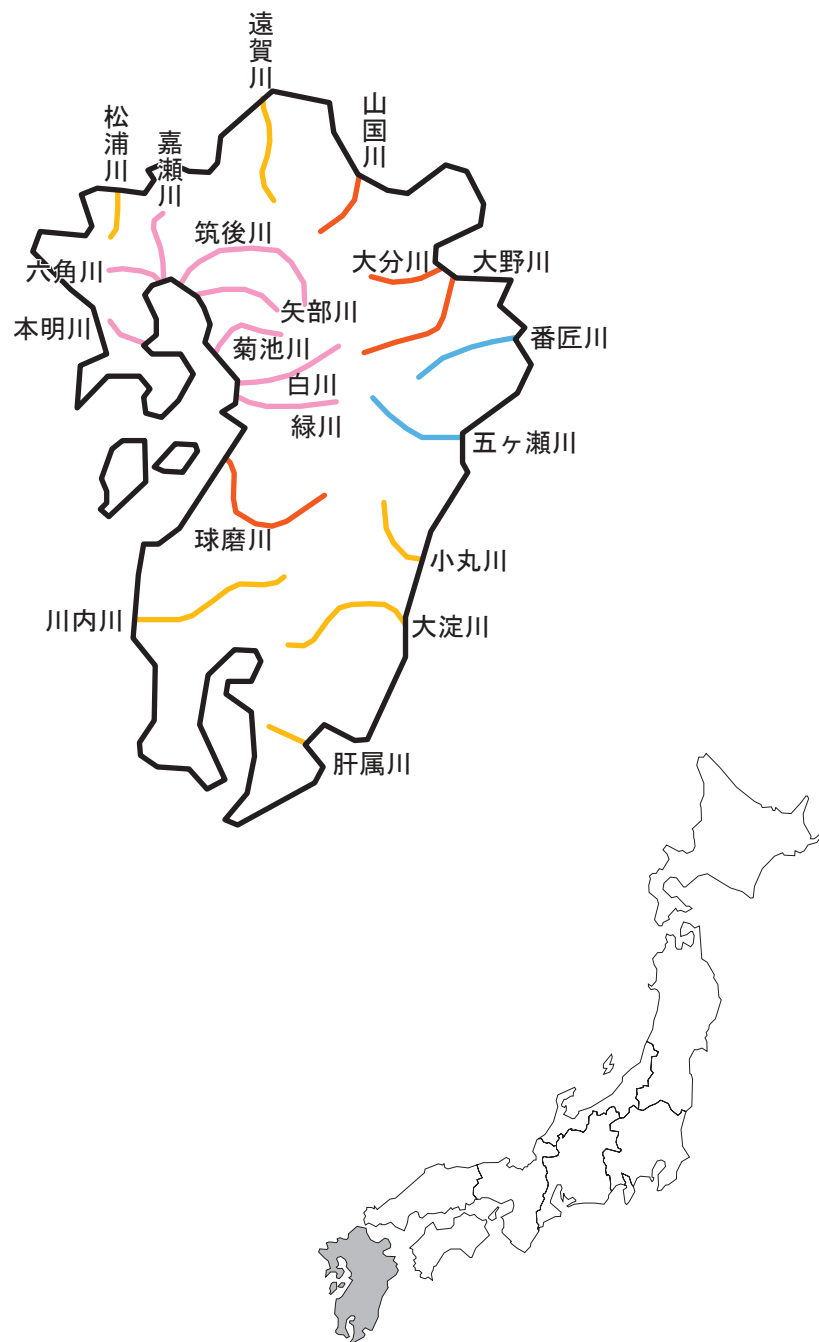
中村河川国道事務所 撮影



1964年9月撮影

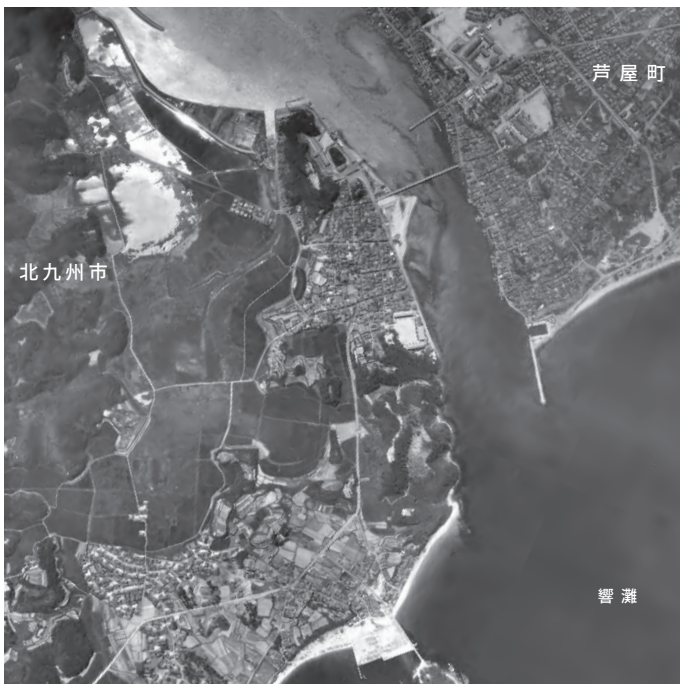
四万十川(しまんとがわ)は、流域面積2,270km²、幹線流路延長196kmを有する。高知県高岡郡津野町の不入山(いらずやま)を源流とし、上流部の大野見村、窪川町を緩やかに南下し、中流域の大正町で流れを西に向け、十和村、西土佐村で激しく蛇行して再び南下し、下流の中村市から太平洋に注いでいる。河口部左岸は導流堤を隔て、下田港が位置している。

九州





国土地理院 撮影 (2005年)



1961年8月撮影

遠賀川（おんががわ）は、流域面積 1,026km²、幹線流路延長 61km を有する。福岡県南東郡にある嘉穂市の郡馬見山に源を発し、飯塚市において穂波川を合わせ市街部を貫流し、直方市において彦山川を合わせ直方平野に入り、さらに犬鳴川、笹尾川等を合わせ芦屋町において響灘に注いでいる。河口部左岸には芦屋港、右岸には柏原漁港が位置している。

山国川 91

九州



山国川河川事務所 撮影 (2001年)



1965年10月撮影

山国川（やまくにがわ）は、流域面積 540km²、幹線流路延長 56km を有する。大分県中津市山国町英彦山（ひこさん）付近に源を発し、南東方向に流れ、中津市山国町守実付近で北東方向に向きを変え中津市耶馬溪町、中津市本耶馬溪町と続き、中津市三口にて豊前平野に出て、友枝川、黒川等を合わせ、中津市において中津川を分派したのち周防灘に注いでいる。河口部右岸には中津小祝港が、左岸には吉富漁港が位置している。



筑後川河川事務所 撮影



1962年8月撮影

筑後川（ちくごがわ）は、流域面積 2,863km²、幹線流路延長 143km を有する。熊本県阿蘇郡瀬の本高原に源を発し、高峻な山岳地帯を流下して、日田市において、くじゅう連山から流れ下る玖珠川を合わせ典型的な山間盆地を流下し、その後、再び峡谷を過ぎ、佐田川、小石原川、巨瀬川、宝満川等多くの支川を合わせ、肥沃な筑紫平野を貫流し、さらに、住吉町にて早津江川を分派して柳川市昭南町で有明海に注いでいる。河口部両岸は干拓により農地としての土地利用が活発である。

矢部川 93



筑後川河川事務所 撮影

九州



1962年8月撮影

矢部川（やべがわ）は、流域面積 647km²、幹線流路延長 61km を有する。福岡県八女郡矢部村の三国山に源を発し、日向神峡谷の溪流をあつめ西流したのち、山間を離れ八女市において最大支川星野川を合わせ、さらに支川辺春川、白木川等を合流し、基準地点船小屋下流で沖端川を分派し筑紫平野を蛇行しながら、途中支川飯江川、楠田川を合わせ、柳川市大和町大坪とみやま市高田町昭和開の境から有明海に注いでいる。河口部両岸の堤内地は干拓による農地としての利用が活発である。



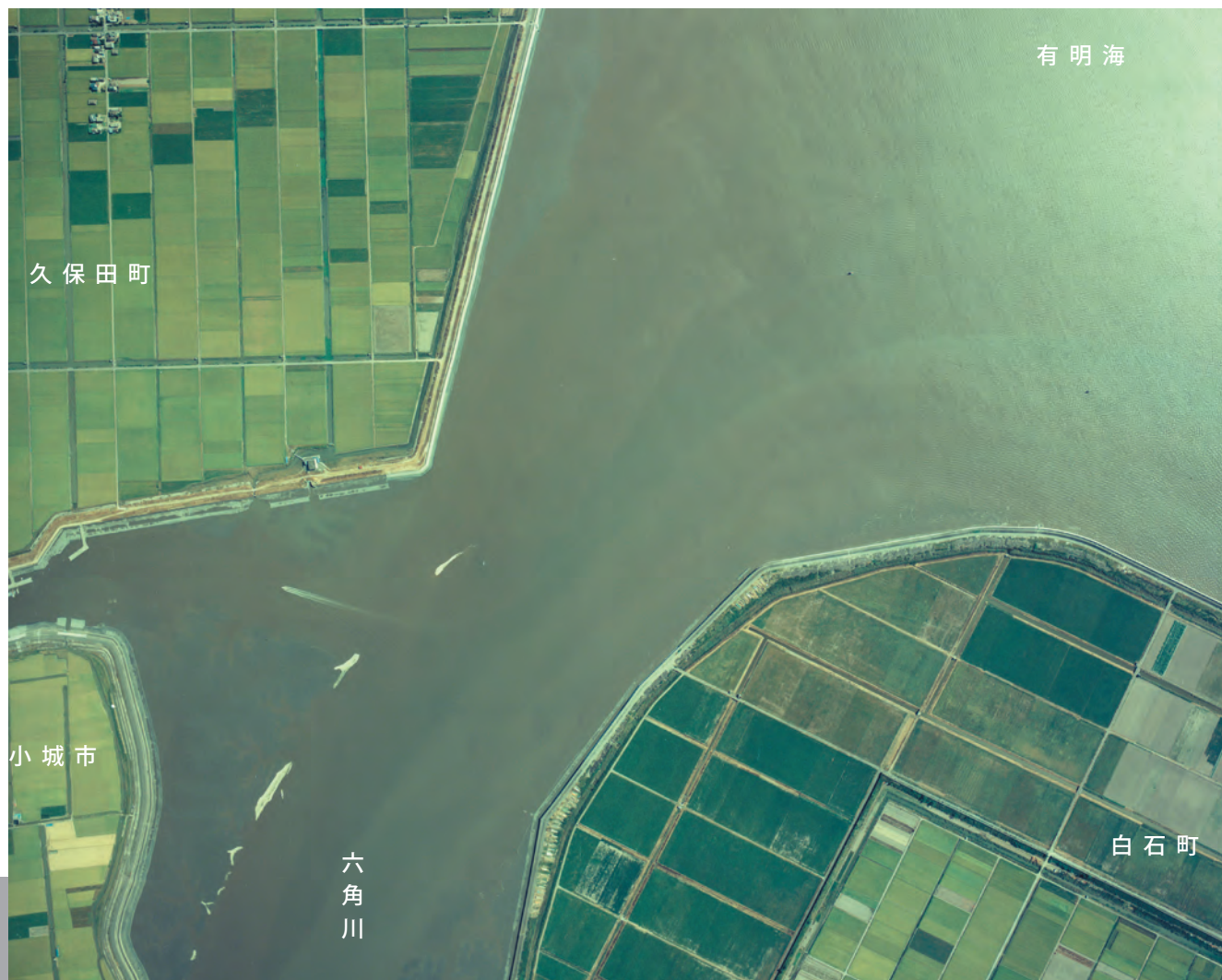
武雄河川事務所 撮影 (2005年)



1964年5月撮影

松浦川（まつうらがわ）は、流域面積 446km²、幹線流路延長 47km を有する。伊万里市南部の黒髪山（標高 518m）北東麓、青螺山に源を発し、山地部を縫って途中多くの支川を合せて北流し、相知町で東松浦東部の山岳地帯から流れ出た厳木川を合わせて流れ、唐津平野に出て半田川さらに河口部において町田川を加え唐津湾に注いでいる。

六角川 95



国土地理院 撮影 (1987年)



1962年5月撮影

六角川（ろっかくがわ）は、流域面積 341km²、幹線流路延長 47km を有する。佐賀県杵島郡山内町神六山に源を発し、概ね東流しながら武雄市二俣において武雄川を合わせ、白石平野を屈曲して貫流し、河口部の住ノ江において牛津川を合わせ有明海に注いでいる。



国土地理院 撮影 (1987年)



1962年5月撮影

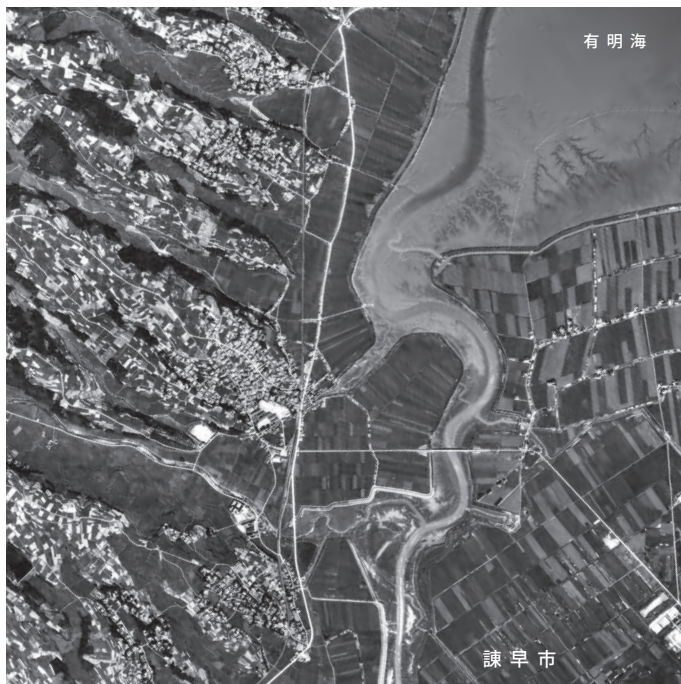
嘉瀬川（かせがわ）は、流域面積 368km²、幹線流路延長 57km を有する。脊振山地の金山（標高 967m）南西麓に源を発し、上流部の北山ダムを経て途中多くの支川を合わせながら山間部を流下し、平野部に入ってから一部天井川となり、途中多布施川に分派したのち、下流で祇園川を合わせて佐賀平野を流れて、有明海に注いでいる。

本明川 97

九州



長崎河川国道事務所 撮影

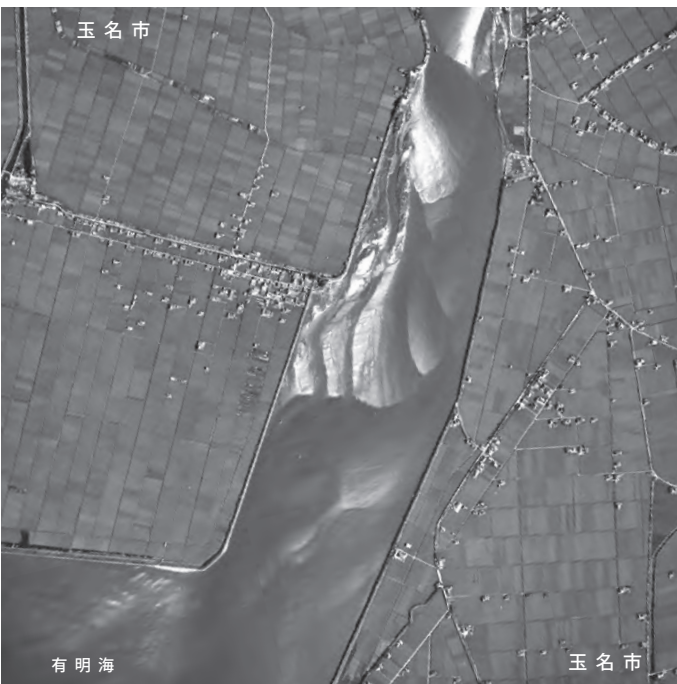


1963年9月撮影

本明川（ほんみょうがわ）は、流域面積87km²、幹線流路延長21kmを有する。五家原岳（標高1,058m）南西麓に源を発し、急峻な山麓を南下した後、諫早市市街地南部で東流し、さらに、福田川、半造川を合わせて北東流に転じ有明海に注いでいる。河口部では干拓が進み、農地としての利用が活発である。



菊池川河川事務所 撮影



1962年9月撮影

菊池川（きくちがわ）は、流域面積 996km²、幹線流路延長 71km を有する。熊本県阿蘇郡深葉山に源を発し、阿蘇外輪山の溪流を集め菊池市を流下して迫間川、合志川、岩野川等を合わせつつ菊池台地を貫流し狭さく部に入り、和仁川および江田川等を合わせ玉名平野に出て玉名市市街地南部を流れ、有明海に注いでいる。河口部では干拓が行われて農地としての利用が活発である。

白川 99



熊本河川国道事務所 撮影 (2006年)

九州



1962年9月撮影

白川（しらかわ）は、流域面積480km²、幹線流路延長74kmを有する。熊本県阿蘇郡高森町の根子岳（標高1,433m）に源を発し、阿蘇山カルデラの南部を西流し、阿蘇外輪山の立野付近において黒川を合せ、熊本市街を南北に貫流し、有明海に注いでいる。河口部では加藤清正以来の干拓が行われている。



熊本河川国道事務所 撮影 (2006年)



1962年8月撮影

緑川（みどりかわ）は、流域面積1,100km²、幹線流路延長76kmを有する。熊本県上益城郡三方山に源を發し、甲佐町において津留川を合わせ、城南町および嘉島町において熊本平野に出て、御船川、加勢川、波戸川および天明新川を合わせ西流へと転じ、熊本市および宇土市において有明海に注いでいる。

球磨川 101



八代河川国道事務所 撮影

九州



八代海

八代市

1962年5月撮影

球磨川（くまがわ）は、流域面積1,880km²、幹線流路延長115kmを有する。熊本県球磨郡水上村の銚子笠（高さ1,489m）に源を発し、九州山地を流下しつつ、川辺川などの多くの支川が流入し、球磨盆地、人吉盆地のほぼ中央を貫流し、再び険しい山の間を流れ、やがて八代平野に出て、前川、南川を分流して八代市で八代海に注いでいる。



大分河川国道事務所 撮影



1961年4月撮影

大分川（おおいたがわ）は、流域面積 650km²、幹線流路延長 55km を有する。大分県大分郡湯布院町由布岳（標高 1,584m）南西麓に源を發し、湯布院盆地を通過し、阿蘇野川、芹川等を合わせて挾間町において、大分平野に入り賀来川、七瀬川を合わせ、大分市市街地を東西に分けながら北流に転じ、別府湾に注いでいる。河口部右岸は導流堤を隔て、裏川の河口部に津留泊地が位置する。

大野川 103

九州



大分河川国道事務所 撮影



1961年4月撮影

大野川（おおのがわ）は、流域面積 1,465km²、幹線流路延長 107km を有する。宮崎県高千穂町北部、大分県と宮崎県境をなす祖母傾連山の祖母山（標高 1,757m）に源流を發し、竹田盆地を貫流し、緒方川、奥岳川等を合わせて中流峡谷部を流下し、大分市戸次において大分平野に出て、さらに半田川等を合わせ、大分市大津留において乙津川を分派し、別府湾に注いでいる。河口部両岸は、埋立が進み、工場、コンビナート等の土地利用が活発である。



佐伯河川国道事務所 撮影



1965年8月撮影

番匠川(ばんじょうがわ)は、流域面積464km²、幹川流路延長38kmを有する。大分県佐伯市本匠の三国峠に源を発し、急峻で屈曲の多い溪谷を流下し、途中久留須川、井崎川等を合わせながら東に流れ、山間部を抜けて、ゆるやかに蛇行して佐伯市街地に至り、さらに堅田川を合わせて佐伯湾に注いでいる。

五ヶ瀬川 105



国土地理院 撮影 (2005年)



1962年9月撮影

五ヶ瀬川（ごかせがわ）は、流域面積 1,820km²、幹線流路延長 106km を有する。九州山地の向坂山（標高 1,684m）東麓に源を発し、宮崎県五ヶ瀬町西部を北流しながら、一旦熊本県山都町に入った後、五ヶ瀬町との境を成してから再び宮崎県へ戻る。高千穂町からは南東流に転じ、深い峡谷を形成して蛇行する。三輪において大瀬川を分派後、延岡市街地を貫流し河口付近にて祝子川、北川を合わせ日向灘に注いでいる。



官崎河川国道事務所 撮影 (2006年)



1962年8月撮影

小丸川（おまるがわ）は、流域面積474km²、幹線流路延長75kmを有する。九州山地の三方岳（標高1,476m）北麓に源を発し、東流して東郷町において屈曲し尾鈴山の西麓に沿って流れ、途中、渡川を合流して木城町南端で平地部に出て再び東流し高鍋町で切原川を合流して日向灘に注いでいる。

大淀川 107



宮崎河川国道事務所 撮影 (2006年)

九州

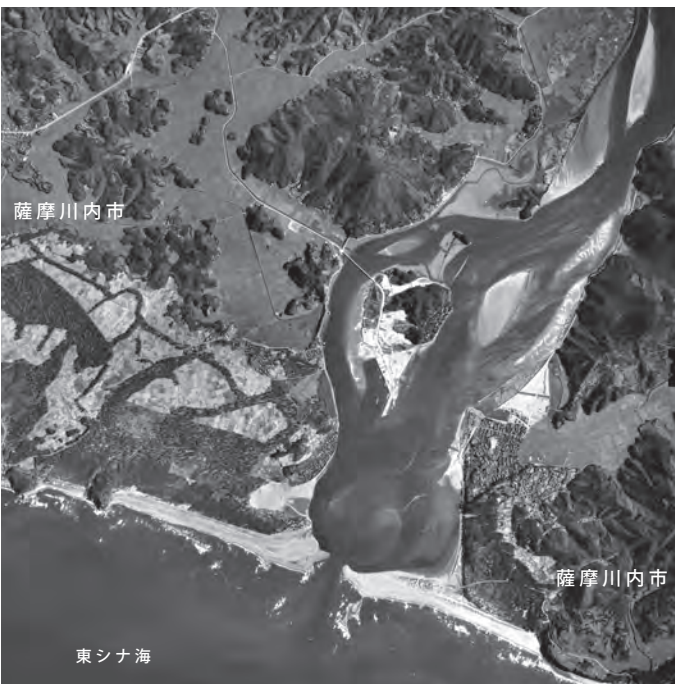


1962年9月撮影

大淀川（おおよどがわ）は、流域面積 2,230km²、幹線流路延長 107km を有する。宮崎県と鹿児島県の県境に位置する中岳（標高 452m）に源を発し、沖水川等の支川を合わせながら、都城盆地を貫流して、中流の山間狭窄部を流れ、宮崎平野に入った後、本庄川等の支川を合わせ、宮崎市都心部の南で日向灘に注いでいる。河口部左岸には、宮崎港が位置している。



川内川河川事務所 撮影 (2007年)



1963年12月撮影

川内川（せんだいがわ）は、流域面積 1,600km²、幹線流路延長 137km を有する。熊本県球磨郡の白髪岳（標高 1,417m）に源を発し、南流して宮崎県えびの市の西諸県盆地（加久藤平野）に出て、支川二十里川、池島川、長江川等を合わせ西流し鹿児島県に入る。鶴田ダム貯水池を流下し、さらに鶴田町、宮之城町の中流狭窄部を下り、川内市（川内平野）に入り、多くの支流を合流して東シナ海に注いでいる。河口部左岸には川内原子力発電所、右岸には川内火力発電所が位置している。

肝属川 109

九州



大隅河川国道事務所 撮影



1963年10月撮影

肝属川（きもつきがわ）は、流域面積 485km²、幹線流路延長 34km を有する。大隅半島西部、高隈山系御岳（標高 1,182m）東麓に源を発し、笠野原西部を南流し、始良川、高山川、串良川等を合わせると共に東流へ転じ、肝属平野南部を流下し、志布志湾に注いでいる。河口部左岸には柏原地区の港が建設中であり、さらに沖合に志布志石油備蓄基地が位置している。

編集後記

河口部の空中写真は、事業実施のための調査など個別河川において撮影されたものや、河口閉塞現象解明等の研究テーマに沿って整理されたものがありますが、全国的範囲で河口部の空中写真を収めた写真集はありませんでした。

平成14年度および15年度において、専門家からなる検討会が設置され、汽水域の河川環境における特徴や物理・化学的現象および人為的改変とレスポンスの関連およびその調査・分析手法に関する検討が行われました。この時に直轄河川事務所のご厚意によって事務所により撮影された河口部の斜め写真を集めることができましたので、これらの写真と関係事務所より新たに収集した写真、昭和40年前後に撮影された国土地理院の空中写真をあわせて写真集とし、河口部の変容を記録として残すことにしました。国土地理院による空中写真は、ここに掲載したものより古い年代もありますが、できるだけ河口部全体が撮影されたものを使用しました。

写真集を眺めてみると、様々な沿岸域開発によって河口部の地形が変わったり、河道内に形成される砂州の位置や形状が変化したり、あるいは砂州が全く消失した様子など、全国一級河川の河口部は大きく変遷したことがわかります。さらには、河口域を生息・生育の場としたり、生活史の一時期に利用したりする生物に及ぼした影響も少なくないことがこのような資料を通して推察することができます。

謝辞

本書をとりまとめるきっかけとなりました「汽水域の河川環境の捉え方に関する検討会」(委員長 福岡捷二(当時) 広島大学大学院教授)の委員の皆様、国土交通省河川局の関係の皆様、並びに河口部の空中写真掲載を快く了承いただきました国土交通省直轄河川事務所、空中写真の複製を許可くださいました国土交通省国土地理院に対し、心よりお礼申し上げます。

岸田弘之 前 研究第二部長

現 国土交通省河川局砂防部保全課海岸室長

阿部 徹 研究第二部長

斐 義光 研究第二部次長

【日本の河口写真集】

2007年3月31日発行

編集・発行 財団法人 河川環境管理財団

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町11-9

TEL: 03-5847-8301 FAX: 03-5847-8308

印刷・製本 日本設計サービス株式会社

〒105-0004 東京都港区新橋6-13-11

TEL: 03-5401-0913 FAX: 03-5401-0915

禁無断複写・転写



財団 河川環境管理財団
法人

